

東北大生の一世紀

著者	永田 英明
雑誌名	東北大学史料館紀要
巻	4
ページ	118-151
発行年	2009-03
URL	http://hdl.handle.net/10097/39873

展示記録

東北大学創立百周年記念展 東北大生の一世紀

会期 平成19年7月28日(土)～12月9日(日)

会場 東北大学史料館2階展示室

永田英明

1 開催の趣旨・経緯と概要

2007年7月28日から12月9日まで、東北大学史料館では、「東北大生の一世紀」展を開催した。

この展示は、東北大学創立100周年記念事業の一環として史料館が企画・実施したものである。史料館では前年度企画展（「学都仙台明治の学生群像」）の終了前から、次年度の創立100周年記念展の検討を進めており、また同じ頃、東北大学創立100周年記念事業実行委員会の「各種イベント実行WG」からも、学内およびその近辺で各種の記念イベントが開催される2007年夏から秋にかけ大学を訪れる卒業生・市民を対象にした展示を企画するよう史料館に依頼があった。こうした動きを受けて、100周年記念事業における部局主催事業の一つとしてこの展示会が企画されるに至ったわけである。展示期間は、上記の理由から、100周年記念関連の下表の各種イベントにあわせ、7月28日(土)～12月9日(日)と設定され、またこれらのイベントにあわせて合計10日間の土・日特別開館を設定した。展示の開催経費は、(財)東北大学教育研究振興財団からの本学創立100周年記念事業の一環としての助成と、平成19年度総長裁量経費の配分によってまかなわれた。

「東北大生の一世紀」という名称にみるように、展示会のテーマは東北大学の「学生の歴史」を全面に出すものとなった。実際の展示内容は東北大学100年の通史展示と学生生活史という二つの軸を絡める形で構成したが、あくまでメインテーマは「学生の歴史」という点に置くこととした。それは、(1)100周年記念事業として実施される他の企画とのバランス、(2)100周年記念まつりやホームカミングデーなど卒業生を強く意識したイベントとの関連性、(3)この数年史料館が実施してきた資料調査・収集および展示活動との関連性、といった要素をふまえた判断である。

もう少し具体的に述べておこう。東北大学ではこの年、創立100周年記念展として江戸東京博物館・仙台市博物館を会場に「東北大学の至宝」を開催することとなっていたが、この展示では、附属図書館・総合学術博物館や各部局の所蔵する学術資料を素材としつつ、東北大学の教授たちによる「研究の歴史」というコンセプトで展示準備が行われていた。また各部局の主催する事業も、研究成果や所蔵資料の公開が中心とであった。

研究業績の紹介が大学にとって重要であることは言うまでもないし、研究分野によって編成されている研究科・研究所等の部局の展示が研究業績の紹介を中心としたものになるのはある意味当たり前のことである。しかしそれだけでは、大学に不可欠なもう一つの構成要素である「学生」の姿が脱落してしまうのではないか。しかも、100周年関連イベントにおいて少なからぬ来訪が予想される卒業生の大半は、「研究者」

7/28～29	片平まつり 2007：研究所一般公開 (於片平キャンパス)
8/25～26	東北大学100周年記念まつり (於片平キャンパス)
10/6～7	第1回東北大学ホームカミングデー (於川内キャンパス)
11/2～12/9	東北大学の至宝 資料が語る一世紀 (於仙台市博物館)

100周年記念関連の同時開催イベント

としてではなく「学生」として大学に在籍した人々である。そうした人々を意識するのであれば、史料館のような全学横断的な意味を持つアーカイブズ施設こそ、「学生」をテーマとする展示を行う必要があるのではないか。またこの点を強調することで、他の様々な記念展示との差別化を図ることができる。

また史料館では、女子学生（「東北帝国大学と女子学生」展）や留学生（「魯迅－歴史のなかの留学生」展）、学徒出陣・学徒動員（「学徒たちの戦争－東北帝国大学の学徒出陣・学徒動員」）など、戦前・戦中期を中心とした学生に関するテーマ展示を行い、「学生生活史」に関する展示を行ううえでのある程度の蓄積が存在した。また2006年度に旧制第二高等学校創立120周年記念として、東北大学誕生以前の明治期仙台の学生生活・文化史を扱った「学都仙台明治の学生群像－東北大学がなかった頃－」展を実施しており、それは今回のプレ企画とも言えるものであった。こうした

成果をもとに「学生の歴史」という観点から展示を構成することで、史料館ならではの特色ある展示会が開催できるのではないかと考えた次第である。

展示期間中の来館者は、合計で3,904人となった。これは昨年の年間見学者数（2,366）を大きく上回るものであるが、その多くは100周年記念イベントが開催された特定の日に集中しており、片平まつり2007、東北大学100周年記念まつり、東北大学ホームカミングデーの開催日（合計7日間）だけで2,356人と全体の3分の2近くを占める。特に8月25、26日の「東北大学100周年記念まつり」は2日間で1,772名という状況で、見学者が長蛇の列をなすという状況であった。またこれら特別な日以外でも、同級会等の会合で来館する団体も多く、全体としてもこれまでに例のない盛況ぶりであったと言えよう。なお会場では、パンフレット『東北大学の一世紀』（16ページ）が、来館者に無償配布された。その内容は現在史料館ホームページ上で公開されている。

2 展示内容

当館の場合、例年の企画展は大学の通史を叙述する常設展示と別に構成するのが通例となっている。しかし本展示会の場合は100周年記念の特別展という位置づけから、史料館の常設展示室全体を一つの展示会場とすることが望ましいと判断した。そのため、各時代の大学の状況を解説する通史展示の部分と、展示のメインテーマである学生史の部分とを相互に織り交ぜた、以下のような構成で展示を構成することとした。

〔第1コーナー 創立期〕

最初に通史展示「東北大学誕生」にて大学設立の経緯や理念等の解説を行ったあと、企画テーマ「東北帝大の誕生と学生たち」を設け草創期の学生像を紹介した。なかでも中心となったのが、旧制高等学校卒業者に受験を認めるいわゆる「門戸開放」をめぐる部分で、入学資格をめぐる規



ポスター・チラシデザイン

程の決裁原本や第一回学生募集の募集広告案、学生の回顧談、黒田チカラ3名の女子学生入学をめぐる経緯などを中心に構成した。同時に、創立期の卒業式についても、「銀時計の時代」と題し紹介展示を行った。

〔第2コーナー 大正－昭和初期〕

通史展示として医科大学・工学部・法文学部や各研究所の増設による総合大学としての整備の過程を跡づけ、続けて企画テーマ「帝大生の学生生活」を設けた。ここでは戦前期の学生生活の状況を多面的に紹介することを意図し、①入学や学業生活、②学生スポーツ、③サークル活動と学友会、④女子学生、⑤留学生、⑥学生思想問題という小テーマを設け展示を構成した。

〔第3コーナー 戦時期〕

通史展示「戦時下の東北帝国大学」で戦時下の大学の状況を解説した後、企画テーマ「戦争と東北大生」にて、いわゆる「学徒出陣」「学徒動員」の問題を中心に、戦時下の学生生活を取り上げた。その内容はかつて当館で実施した企画展示の成果を凝縮したものとなっている。

〔第4コーナー 戦後復興期〕

通史展示「戦後復興と新制東北大学」で敗戦から新制大学発足に至る経緯を大まかに跡づけたのち、企画テーマ「戦争復興と学生の「チカラ」」を設定し、(1) 敗戦直後期の様々な学生組織の活動、(2) 旧制高校文化との関係、(3) 新制東北大学のアイデンティティ構築に関わる試み（学生歌、シンボルマーク、大学祭など）、(4) 新制大学の学生寮などのテーマを取り上げた。

また、時期的には次の第5コーナーに入りうる内容であるが、学生文化の「復興」を具体的に示すテーマとして(5) 学生スポーツおよび(6) 学生文芸活動をやや独立的にとりあげた。学生スポーツについてはさらにボート部のローマ・オリンピック出場（1960年）をとりあげ、当時のメンバーの一人から提供された日本選手団のユニフォーム等の関連資料を展示した。

〔第5コーナー 高度経済成長期〕

このコーナーは、通史展示「高度経済成長と東北大学」に続き、①「戦後社会の変化と東北大生」②「「トンペイ」学生の歳月」という二つの企画テーマで構成し、①についてはさらに(1) 川内の風景（教養部の川内地区への移転によって誕生した「川内分校」の風景）、(2) 東北大生の「60年



展示会場の風景（8月25日）



第2コーナー付近



学生寮、戦後学生スポーツの展示

安保」、(3) 東北大学の「大学紛争」などの小テーマを設け構成した。時期的には、①はおおよそ昭和 30 ～ 40 年代、②はおおむね昭和 50 ～ 60 年代を意識して構成した。

〔第 6 コーナー 現代〕

通史展示「東北大学新時代」で 90 年代以降の大学の動向について解説し、企画テーマ「東北大生の現在」では、近年の学生生活実態調査のアンケート結果等を紹介した。

〔その他〕

以上のほか、今回の展示会の目玉となる実物展示として、東北大学漕艇部が全日本学生選手権 3 連覇（1980 年）を達成した際に使用した木造艇「萌野」号を展示公開した。

また展示室の入口付近には、展示開催期間中に新たに寄贈された、東北帝大学運動会や学友会各部のバッジ・メダル類などの展示コーナーを設け公開を行った。



第 5 コーナー付近と「萌野」号

3 来館者アンケートの結果

展示室に設置したアンケート用紙は、合計で 289 枚を回収した。回答者の内訳は院生・学生 21、教職員 10、卒業生・中退生 84、一般 131、その他・無回答 43 であった。この比率がそのまま見学者の比率を示すわけではないが、一般来館者と共に卒業生が多く含まれていることに注意したい。年齢の統計は、10 代－20 人、20 代－30 人、30 代－20 人、40 代－51 人、50 代－50 人、60 代－40 人、70 代以上－40 人となり、比較的年輩の方の比率が高いようである。展示内容については 183 人が「おもしろかった」、65 人が「ふつう」、1 人が「わからなかった」という回答である。以下質問項目ごとに結果をまとめておく。

①特に印象に残ったテーマや資料がございましたらご記入ください

見学者の世代や関心に応じて多様であったが、展示室中央に鎮座したボート「萌野」号とともに多くの方が挙げたのが、学徒出陣・学徒動員に関する資料。なかでも当時の学生の手記を展示した「学徒出陣」コーナーを挙げる回答が目についた。また大正 2 年の女子学生誕生に関する展示、戦後の学生運動（闘争）関係、学生寮関係の展示を挙げる回答も目についた。面白いところでは、「帝大生の学生生活」－「思想問題と昭和初期の学生」のコーナーで紹介した「現代学生罵倒論」。これは理学部の学友会誌『自修会報』（第 15 号、昭和 4 年）に掲載された、当時の学生を生物分類学的に分析した同名論説の内容をパネル 1 枚の表としてまとめて紹介したものだが、「新型学生類」（モダンボーイ族、マルクスボーイ族…）、「現代学生類」（中堅学生族、スポーツマン族…）、「旧型学生類」（変物学者族、反動学生族…）等といった具合にシニカルな視点で「現代」学生を紹介する内容が受けたのか、比較的人気を集めたようだ。

②この展示に不足しているテーマや資料がございましたらお教え願います

「東北大学の研究成果」や「名物教授の紹介」といった回答が多かったが、こうした要素は今回の展示ではテーマとして意識的に外したものである。その他で多かったのが、大学紛争に関する説明が不十分、という指摘であった。紛争の原因、なぜ学生がデモに出たのかという点の解説、

紛争がその後の大学運営に与えた影響など、紛争に関する説明について不十分さを指摘した回答が目につく状況である。

紛争をどう描くか、という点は、もちろん展示の準備段階でも重要な課題として意識し、当時の膨大なビラなど関連資料の調査を進めてはいた。しかし限られた期間のなかでその成果を十分に整理・消化するには限界があり、展示としては十分に反映することはできなかった。その意味で、こうした反応も十分に予想できるものであり、今後の大きな課題となった。

③あなたが思う東北大生のイメージを教えてください。

展示テーマにあわせ「東北大生」のイメージを検証したいと考え設けた。回答は多様だが（右表参照）、最も目立ったのは「まじめ」という回答。以下「頭がよい」「研究熱心」「素朴」といった回答が並ぶ。いわゆる「イカトン」に集約されるような回答だけでなく、自由・開放的、あるいは質実剛健といったイメージも比較的あるようだ。

④展示全体に対する感想・意見

別項で書かれたものも含め目についたものを挙げておく。

- ・「東北大生の一世紀」の着想が着実。「東北大学の」としないところに心惹かれた。
- ・今高一で、東北大学に興味をもつきっかけになった。
- ・解説の文字は年寄りには小さくて読みづらかったようです。年配客が多いので、気持ち大きめな文字を心がけた方がよろしいようです。
- ・展示がわかりにくい。文字が多すぎて、読みにくい。展示品が曲がっているのはサイテー！キャプションの貧弱さ（汚い貼り方）は、市民に見てもらう意識の低さ！
- ・学生の記録を並べることを中心にすることで、学ぶ側の視点から歴史がみえて大変おもしろい。（教官の業績が他大学では多いのに比べ）
- ・もっとこの展示の宣伝をした方がいいのではないですか？もったいないです。

まとめ

従来展示との比較という観点で見ると、今回の展示テーマの最大の特色は、戦後の学生生活史・文化史に意識的に取り組んだ点に求められるであろう。100周年記念事業としての実績、という観点から言えば、学生史をテーマとして選んだ事については比較的好意的な意見が多く、こ

まじめ、コツコツ	35
頭がよい、優秀、知識豊富	15
研究熱心、研究漬け	11
素朴、純朴	7
自由、開放的、のびのび	5
おとなしい、地味	5
すごい、すばらしい、すてき	6
質実剛健	4
文武両道	4
スマート、cool	3
堅い	3
誠実	3
優しい	3
最近アカ抜けた	3
マイペース、周囲に流されない	2
のんびり、おっとり	2
東北ではすごい	2
イカトン、トンペイ	2
破天荒さが不足。バンカラに戻れ	2
エリート	2
のびやか	2
温かい	2
積極性、どん欲さが不足	2
プライド・気概を持って！	2
色白めがねで細身	1
最近モラルが低下	1
地力がある	1
期待できる人々	1
大きなリュックサック	1
未来の研究をしている	1
頑張る	1
中堅技術者の卵	1
心が健康	1
元気で活気がある	1
昔は大人だった	1
「東北大生」としての特色はない	1

アンケート回答者の「東北大生」イメージ
類似するものを統合。複数回答あり。

の点は一応の成功であったと考えている。

もっとも、展示の内容や展示物の「出来映え」については、先にも挙げたとおり厳しい意見も頂戴する結果となった。かなり多数のテーマを取りあげることとなったが、その分表層的・網羅的な紹介にとどまるものも多く、掘り下げるべくして掘り下げられなかったテーマが多数残ったことも事実である。またそのなかであらためて課題と感じたのが、戦前・戦後の学生文化の連続面と断絶面をどう捉えるか、という点であった。戦前から戦後期の「学生文化史」の推移を歴史的な視点で整理していく試みは、実は現代思想・現代文化をどのように捉えるか、という問題と不可分であり、それ自体大きな課題である。そのなかで「東北大生」の歴史をどのように構成できるのか、今後の大きな課題となろう。

「東北大生の一世紀」展示資料等一覧

※「東北大生の一世紀」展の記録として、解説パネル及び展示資料を展示構成に則して整理掲載した。

※二重線で囲んだものが企画コーナーのテーマ解説、単線で囲んだのがその下部の小テーマの解説である。

※通史テーマの解説パネルについては、タイトルのみを記しその他の内容記載を省略した。

※個々の資料のキャプションについては、原則として展示に使用した情報を掲載したが、紙幅の関係から一部省略したものもある。

※写真資料に【】で示した番号は、当館で公開中の「東北大学関係写真データベース」におけるデータNo.を示す。<http://webdb3.museum.tohoku.ac.jp/tua-photo/index.php>

※展示構成は全体を永田が担当したが、小テーマ「漕艇部 ローマ・オリンピック出場」は曾根原理、「戦後東北大学の文学活動」は大原理恵がそれぞれ担当した。

〔第1コーナー 創立期〕

●通史テーマ「東北大学誕生」

1-1 地元雑誌の東北大学設置論（『仙台』第3号掲載「東北大学論」） 1899年（明治32）警醒社刊

高柳洋吉寄贈資料

1-2 東北大学を岩手県に設置する請願書（複製）

原資料は岩手県立図書館所蔵

1-3 東北帝国大学開学式における桜井錠二祝辞

1913年（大正2）9月22日

岩村緑氏寄贈資料

1-4 留学中の教授が授受した葉書（眞島利行宛本多光太郎・日下部四郎太書簡）

1908年（明治41）1月1日

眞島利行文書

1-5 『東北帝国大学理科報告』Vol. 1

1911年（明治44）

東北帝国大学理科大学刊

1-6 物理学教室機械購入台帳

1911年（明治44）～45年（昭和20）

理学部物理学教室資料

●企画テーマ「東北帝国大学の誕生と学生たち」

東北帝国大学は1907年に設置されたが、理科大学の開講は4年後の1911年9月のことであった。

三番目、しかも理科という学生を集めにくい分野でスタートした仙台の東北帝国大学は、これらを逆手にとった大胆な戦略に出た。当時帝国大学は旧制高等学校の卒業者のための学校であったが、東北帝大は専門学校の卒業者にも受験資格を認めた。この「門戸開放」により、理科大学には高校を出た若人から40過ぎの紳士まで、向学心に燃えたバラエティに富む学生たちが集まり、独特の風土を創りだした。

それはまた、1913年（大正2）に日本初の女子学生をこの大学に誕生させ、女性科学者のパイオニアを仙台の地から生み出す下地となった。

1-7 理科大学最初の講義のノート（複製）

1911 年 (明治 44) 9 月～

富山保氏提供

理科大学最初の授業は、9 月 17 日午前 9 時よりはじまった、数学科林鶴一教授の微積分に関する講義であったと言われている。

1-8 『自修会報』創刊号「発刊の辞」

1915 年 (大正 4) 3 月

理科大学の学友会「自修会」の会報。スポーツ、散歩会、その他当時の学生たちの様々な行事が記され、当時の東北帝大学生の学生生活を知る最良の資料。

○「門戸開放」

1-9 東北帝国大学理科大学学生募集広告案

1911 年 (明治 44) 6 月 23 日

『教務書類 明治四十四年度 (本部)』所収
高等学校卒業生以外の出願資格を①高等師範学校・学習院・東北帝大農科大学予科・文部省直轄各高等工業学校の卒業生と、②中学校ないし師範学校の教員免許所持者、という二種類に分けて説明している。その方針は「東北帝国大学の開放」と東京朝日新聞に紹介され大きな反響を呼んだ。

1-10 「門戸開放」の光景—理科大学草創期のひとびと—〔資料パネル〕

1915 年 (大正 4) 3 月

棕鳥生「仙台に来ての所感」(『自修会報』第 1 号) より

1-11 理科大学 1 期生の回想から〔資料パネル〕

1924 年 (大正 13) 12 月

小野平八郎「東北帝大の萌芽時代」(『自修会報』第十号) より

1-12 桜ヶ岡公園における自修会発会式〔写真〕

1913 年 (大正 2) 5 月 2 日撮影／【C009188】

『自修会報』22 号より

1-13 学生集会所にて〔写真〕

1915 年 (大正 4) 頃／【C001313】

「東北帝国大学理科大学第二回卒業記念写真帖」より

○女子入学

1-14 女子入学に関する文部省の質問状

1913 年 (大正 2) 8 月 9 日

旧庶務部総務課移管文書

東北帝国大学が独自に進めていた女性 4 名の受験許可に対し、文部省が「女子を帝国大学に入学せしむる事は前例これなきことにてすごぶる重大なる事件にこれあり」云々と、説明を求めた文書。大学側は 3 名の女性に対する合格を発表したあとで総長が文部省に出向き「事後報告」を行った。

1-15 理科大学の入試問題 (写)

1913 年 (大正 2) 9 月

入試課移管『教務書類 大正二年度』所収
奈良女子高等師範学校 (奈良女子大学の前身) からの入学試験照会に関する問い合わせに対し返送したもの。理科大学が女性 3 名の入学を許可したことを聞き、同校からも志願者が出る可能性があるのだからかじめ資料を収集したい、との照会であった。

1-16 化学雑誌会通知

1916 年 (大正 5) 10 月

理学部化学教室寄贈資料

教官や大学院生・学生たちによる研究会として「雑誌会」等が各学科で行われた。理科大学卒業後大学院に進学した黒田チカの名前が見える。

1-17 女子学生の誕生—黒田チカの回想から—〔資料パネル〕

黒田チカ「化学に親しむ喜びと感謝」(『化学教育』第 3 号) より

1-18 日本初の女子学生—黒田チカ、牧田ラク、丹下ウメ—〔写真〕

1-19 理科大学数学科第 2 回卒業記念〔写真〕

1915 年 (大正 4) 7 月／【C011914】

林鶴一旧蔵資料

○草創期の卒業式

銀時計の時代

1914 年 (大正 3) 7 月、東北帝国大学理科大学第 1 回の卒業式が行われた。当時の学年歴は 9 月から 7 月までとなっており、卒業式は真夏に行われた。当時の卒業記念写真には、夏用の制服を着た学生たちのすがたを見ることができる。

当時の帝国大学の卒業式では、成績優等者に対する天皇からの下賜品として「銀時計」を授与するセレモニーが行われていた。なかでも東京帝国大学の卒業式には天皇の行幸が行われ、天皇の面前で銀時計の授与が行われた。国家を支える人材の育成機関として出発した帝国大学の卒業式は、その「成果」を天皇に報告する場でもあったのである。東北帝国大学の場合天皇の行幸こそなかったものの、「恩賜の銀時計」の授与はやはり行われていた。

もっともこの「銀時計」が東北帝大の学生に与えられたのは、第一期生が卒業した 1914 年からの 5 年間に過ぎない。実は 1919 年 (大正

8) 以降、卒業式そのものが行われなくなってしまったのである。卒業式はその後 1930 年(昭和 5)に復活されたが、「銀時計」は復活されることはなかった。

1-20 東北帝国大学理科大学第 1 回卒業生〔写真〕

1914 年(大正 3) 7 月／【D06-1-011-001】

林鶴一旧蔵資料

卒業を控えた学生たちが理科大学の前で撮影したものの。

1-21 理科大学第 1 回卒業式総長告辞

1914 年(大正 3) 7 月

旧庶務部移管文書

1-22 理科大学第 3 回卒業式答辞

1916 年(大正 5) 7 月 17 日

庶務部移管文書

1-23 (参考) 恩賜の銀時計

片山正夫資料

理科大学初代教授の一人、片山正夫教授が東京帝国大学卒業時に授与された銀時計。

1-24 (参考) 恩賜の銀時計

菊田一郎資料

1-25 理学部化学教室第一回卒業記念写真の裏面

1914 年(大正 3) 7 月

第一回卒業生たちの「寄せ書き」が記される。

1-26 本多光太郎教授の評点簿

1916 年(大正 5) 頃

理学部物理学教室寄贈資料

1-27 理科大学平面図

『東北帝国大学理科大学一覧 明治 45 年—大正 2 年』

1912 年(明治 45)

1-28 理科大学で使用された光学顕微鏡

大正期

旧理学部地質学古生物学教室寄贈

〔第 2 コーナー 大正～昭和初期〕

●通史テーマ「総合大学としての確立」

2-1 総長事務引継ぎに関するメモ

1917 年(大正 6)

総務部移管文書

第 2 代総長北條時敬の転出に際して作成されたもの。化学工業研究所の設置、医科大学教授の人選など様々な課題が列挙されるなか、「本大学の主義」として「研究奨励」と「三分科大学の連絡」とが挙げ

られる。

2-2 斎藤報恩会からの研究助成に関する届出

1931 年(昭和 6) 4 月 4 日

総務部移管『斎藤報恩会奨学関係』所収

八木秀次、抜山平一、千葉茂太郎らが助成を受けて実施した「電気を利用した通信法の研究」の届出書類。この研究のなかから、八木一宇田アンテナをはじめとする数多くの優れた成果が生み出された。

2-3 アインシュタイン、モーリッシュのサイン

1922 年(大正 11) 12 月

総務部移管『芳名録』所収

上のページ中央やや右側に、小さめの文字で書かれている。アインシュタインはこの年講演旅行で日本各地を巡回。モーリッシュは当時理学部生物学科に在任していた世界的植物学者。

2-4 『法文学部の組織について』

1922 年(大正 11)

古田良一文書

法文学部創立委員長であった佐藤丑次郎が法文学部準備段階で報告した「内申書」を引き継いだもの。その最大の特色は、自由聴講科目制度を導入し法科・文科の垣根を超え履修しやすくすることであった。

2-5 『附属図書館第二部館務日誌』

1923 年(大正 12)

附属図書館移管文書

法文学部に赴任した教授たちの挨拶、打合せや留学先で購入した図書の受入に関する記事が見られる。

2-6 北京風俗図譜の製作に関する青木正児書簡

1924 年(大正 13) 11 月

附属図書館移管文書

北京で修学中の青木が、近代化により失われゆく市井の風俗を記録するために画師を雇って図譜を作成したい、と図書館長であった武内義雄教授に書き送ったもの。その結果作成されたのが、現在本学附属図書館に所蔵されている「北京風俗図譜」である。

2-7 『文化』創刊号

1934 年(昭和 9) 1 月

東北帝国大学文学会編／岩波書店刊

2-8 住友家からの鉄鋼研究資金寄附願

1915 年(大正 4) 12 月

総務部移管『寄附関係書類 明治四十四年以降』

本多光太郎の研究資金の寄附に関する書類。この助成は臨時理化学研究所第二部における、K S 磁石鋼

等の優れた研究成果を生み、のち鉄鋼研究所・金属材料研究所設立の基盤となった。

2-9『東北帝国大学農学部設置趣意書』

1932年 (昭和7)

総務部移管文書

東北帝国大学への農学部設置の動きは、札幌の農科大学を北海道帝国大学として分離独立させたあと、大正末期の段階からすでに存在していたが、財政的な理由から先送りされていた。1939年 (昭和14) に住友家や斎藤報恩会、宮城県等の寄附で設立された農学研究所は、この農学部設置運動が形を変えて実現したものである。

2-10 選鉱製錬研究所設置要綱 (概算要求書類)

1939年 (昭和14) 6月

鈴木廉三九文書

●企画テーマ「帝大生の学生生活」

帝大生の学生生活

医科大学・工学部・法文学部といった学部の増設に伴い、東北帝大に学ぶ学生は大正期を通じて増え続け、昭和初期には1500人を超えるに至った。こうした中で全学的な文化・スポーツ団体も増え、学生達の活動は活発になっていく。

教師と学生たちの深いつながりも、帝大の学生生活の特色であった。当時多くの教授たちには自宅面会日があり、学生達はそれぞれ師と仰ぐ教師の自宅を訪ねては語らいの場を持った。1937年に木下杢太郎の筆名で知られる太田正雄教授の下で開かれた「鷗外の会」も、左傾学生の「思想善導」という建前をとりながら、その実質は鷗外の作品を通じてヒューマニズムを学ぶ、教師と学生の「教養」の会であった。

2-11 東北帝国大学学生実態調査〔パネル→別表〕

1935年 (昭和10)

『東北帝国大学生生活実態調査』より

2-12 学生食堂に関する学生の投書

1939年 (昭和14)

『投書綴』 学生部移管文書

2-13 東北帝国大学厚生会 (購買部) の価格表

1939年 (昭和14) 12月

鈴木廉三九文書

2-14『東北帝国大学法文学部学生要覧』

1939年 (昭和14)

各教官の「面会日」が記されている。小宮豊隆や阿部次郎の面会日には学部の枠組みをこえ多くの学生が集まり、学生達はその会合を、かつて漱石のもとで開かれた「木曜会」に因んで木曜会、水曜会と呼んだ。

2-15 工学部生 向山の鹿落坂にて〔写真〕

1924年 (大正13) 頃／【D06-1-002-246】

電気工学科大正十一年入学生分散記念アルバムより

2-16 理学部生 一番町松竹映画館の前で〔写真〕

1938年 (昭和13) 頃／【C008624】

理学部数学科卒業アルバム より

2-17 理学部生 大町通 藤崎前で〔写真〕

1938年 (昭和13) 頃／【C008625】

理学部数学科卒業アルバム より

2-18 パチンコで遊ぶ学生〔写真〕

1938年 (昭和13) 頃

理学部数学科卒業アルバム より

2-19 食堂に集う理学部学生〔写真〕

1938年 (昭和13) 頃／【C008628】

理学部数学科卒業アルバム より

2-20 北門前の学生集会所にて〔写真〕

1938年 (昭和13) 頃か／【C008605】

田中清氏寄贈アルバム より

2-21 法文時報付録 仙台市内図

1929年 (昭和4)

東北大学百年史編纂室収集資料

2-22 角帽姿の学生〔写真〕

1926年 (大正15) 頃／【D05-2-088-004】

東北帝国大学医学部関係写真アルバムより
帝国大学の時代以降1950年代頃までは、「角帽」は大学生 (男子学生) にとっての必需品であった。

2-23 法文学部経済科の教師と学生 (大年寺山のいちご園 (画扇園) にて)〔写真〕

1935年 (昭和10) 頃／【C003303】

米沢治文寄贈資料

2-24 法文学部英文学研究室のコンパ〔写真〕

1927年 (昭和2) 2月20日／【C007211】

戸田閑男資料

南町通の「桜井」にて。土居光知、ラルフ・ホヂソン、小林淳男といった教官と学生たち。

2-25 工学部生 友と語らう (松前重義、永井健三ら)〔写真〕

1924 年（大正 13）頃／【D06-1-002-043】

電気工学科大正十一年入学生分散記念アルバム

2-26 クラス会の会場選び〔写真〕

1938 年（昭和 13）頃／【C008519】

理学部数学科卒業アルバム より

2-27 大学公開（和算書陳列）〔写真〕

昭和 13 年（1938）頃か／【C008703】

理学部数学科卒業アルバム より

○学業生活

東北帝大への入学

戦前期の制度では、旧制高校を卒業すれば帝国大学への進学自体はそれほど困難なことではなかった。開学以来「門戸開放」を方針としてきた東北大学でも、旧制高校出身者に入学の優先権が与えられていたことは変わらない。高等学校出身者だけで定員が埋まらない場合、残りの枠をめぐって専門学校や高等師範学校の学生が競争試験で入学を争ったのである。さらに、指定された以外の学校の卒業者は、高等学校卒業と同程度の学力を有する、という認定を埋めるための試験をその事前に受けなければならなかった。「門戸開放」の恩恵を受けるのもラクではないのである。

2-28 大正十五年度法文学部入学者心得

1926 年（大正 15）

服部英太郎文書

2-29 入学宣誓式〔写真〕

1937 年（昭和 12）頃／【C001715】

『東北帝国大学医学部卒業記念 第十八回』より工学部講堂にて。壇上中央は本多光太郎総長。当時の入学式は「入学宣誓式」と呼ばれ、学生一人一人が大学の方針に従い学問に勤しむことを誓約するセレモニーであった。

2-30 理学部学生の学修簿

1937 年（昭和 12）

長谷川米吉資料

単位を取得した科目の名称と担当教官の印が記される。

2-31 工学部学生を受講ノート（浜住松次郎教授講義「金属材料学」）

1938 年（昭和 13）～39 年

大平五郎寄贈資料

2-32 理学部化学教室 無機化学雑誌会記録

1939 年（昭和 14）

理学研究科化学専攻寄贈資料

教官や学生による海外文献等の勉強会の記録。

2-33 附属図書館『閲覧の栞』

1935 年（昭和 10）

2-34 医学部 病理学試験問題〔写真〕

1937 年（昭和 12）頃／【C001509】

『東北帝国大学医学部卒業記念 第十八回』黒板上の額に見える「教えて厳しからざるは師の怠なり」は医学部の木村男也教授のモットー。

2-35 理学部数学科演習（窪田教授）風景〔写真〕

1938 年（昭和 13）頃／【C008522】

理学部数学科卒業アルバム より

2-36 工学部電気工学科の実験風景〔写真〕

1924 年（大正 13）頃／【D06-1-002-035】

電気工学科大正十一年入学生分散記念アルバムより

○学友会とサークル活動

学友会とサークル活動

東北帝大の学友会組織は、自修会（理）・良陵会（医）・工明会（工）といった学部単位の組織がまず結成され、運動系や文化系のサークル組織もそれぞれの学部会の中に設置されていた。しかし 3 学部が揃った 1921 年（大正 10）、これらを基礎に全学の学友会が結成されることとなった。全学学友会にはそれまで存在した 3 つの学部会（法文学部設立後は法文学部「強立会」も加入）が傘下に入るとともに、運動系・文化系の全学的な部組織が結成された。発足当時の学友会には文芸部・音楽部の 2 つの文化系サークルと 7 つの運動系サークル（陸上、野球、庭球、柔道、剣道、弓道、乗馬）が参加した。

しかしこの全学学友会は、学部会と運動部の予算配分をめぐる対立、教員学生の親睦を重視する学生と「学生自治」の徹底を求める学生の対立など学友会のあり方そのものをめぐる対立と混乱により、1929 年（昭和 4）に解散してしまう。その後運動系の各部は「東北帝国大学体育連盟」を結成して活動を続けた。文化系のサークルについては、音楽部・文芸部が「文芸連盟」を結成したが、文芸部はのちに学生思想問題を契機に解散させられる。一方で、この「連盟」に所属しない団体が多数生まれていった。

2-37 東北帝国大学の学生団体〔パネル→別表〕

1936 年頃

『東北帝国大学学生便覧』より

2-38 自修会運動会での数学教室の出し物「数列豪華版」〔写真〕

1937 年（昭和 12）／【C008409】

長谷川米吉資料

2-39 文芸部主催講演会の風景〔写真〕

1928 年（昭和 3）／【C007204】

戸田閑男資料

柳田國男、斎藤茂吉の講演会。壇上は斎藤茂吉。文芸部は当時阿部次郎が顧問をつとめ、斎藤、柳田、和辻哲郎などを招いて講演会を開催した。

2-40 東北帝国大学彩光会展覧会にて〔写真〕

1939 年（昭和 14）10 月

仙台三越にて。彩光会は東北帝大学生の絵画サークル。

2-41 医学部自治会販売部〔写真〕

1937 年（昭和 12）頃／【C001728】

「東北帝国大学医学部卒業記念 第十八回」

1924 年（大正 13）に学生達によって結成された自治会は経済的に困窮する学生の支援や古医書の売買、斡旋、売店の運営等の事業をおこなった。

2-42 『良陵』（医学部）第 51 号

1940 年（昭和 15）

2-43 『工明会誌』（工学部）十周年記念号

1930 年（昭和 5）

2-44 『自修会報』（理学部）第 20 号

1934 年（昭和 9）

理系 3 学部の学友会報は、各学部学生の評論・文芸活動の場としても機能した。

2-45 東北帝国大学主催弁論大会〔写真〕

昭和初期

風見哲夫氏寄贈

2-46 学友会音楽部創立報告書

1921 年（大正 10）

学友会オーケストラ部寄贈

1921 年（大正 10）、音楽好きの学生有志 16 名が発起人となり発足した。発足メンバーの中には、のちの文化勲章受章者・岡部金治郎の名前も見える。

2-47 音楽部第 24 回定期演奏会〔写真〕

1941 年（昭和 16）

学友会オーケストラ部寄贈写真

○学生スポーツ

東北帝大の学生とスポーツ

1919 年（大正 8）、第 3 代小川正孝総長の誕生を記念した運動会が、追廻の練兵場にて開催された。大会には東北地区の高等学校・専門学校や県内の中学校からの選手が招待され、以後恒例の行事として「東北帝国大学陸上大運動会」が毎年開催されるようになる。当時東北では最大の陸上競技大会であったという。

帝国大学の学生は、高等学校や専門学校時代にスポーツに打ち込んだ経験を持つ者が少なくない。当時の学生スポーツの中心はどちらかといえば高等学校や専門学校の学生であり、帝国大学の学生は一般には高校時代ほど熱を上げて運動に打ち込んだわけではない。しかしそれでも、高校時代に親しんだスポーツを大学でも、という形で同好の組織が徐々に作られていくことは自然の成り行きであった。自修会・工明会といった各学部の学友会にはそれぞれ同好の会が作られていたし、1921 年（大正 10）に東北帝国大学学友会が発足した際には、陸上競技部・野球部・庭球部・柔道部・剣道部・弓道部・乗馬部等の運動部があったという。また、帝大の学生たちのもう一つの役割として、高等学校や専門学校の学生スポーツを指導・振興する、という側面があった。旧制二高の花形運動部である端艇部には東北帝大に進学した学生がコーチをつとめていた。また東北帝大自らが高等専門学校の各種競技大会を主宰し、地域の学生スポーツ振興に役割を果たしていたことも重要である。

2-48 工明会運動部 東北帝国大学陸上競技大会運動会優勝記念〔写真〕

1922 年（大正 11）10 月 29 日／【C010103】

『工明会雑誌』第 4 号より

1919 年（大正 8）にはじまった東北帝国大学陸上運動会は各学部の対抗戦としておこなわれ盛り上がりを見せた。大会には東北各地から中学・高校等の生徒が招かれ、当時東北地方最大の陸上競技大会であった。

2-49 弓道部の師範と学生（阿波研造他）〔写真〕

昭和初期

風見哲夫氏寄贈

2-50 松島湾でボートを漕ぐ学生〔写真〕

1938 年（昭和 13）頃／【C008610】

田中清旧蔵アルバム

2-51 テニスコートにて〔写真〕

昭和 13 年（1938）頃か／【C008537】

田中清旧蔵写真アルバム

2-52 学友会発会記念陸上運動会絵葉書

1921 年（大正 10）

1919 年（大正 8）から始まった東北帝国大学陸上運動会は、第 3 回からは学友会の行事として行われた。

2-53 対北海道帝国大学籠球定期戦ペナント

1937 年（昭和 12）

学友会バスケットボール部寄贈

北海道帝国大学との定期戦は当時から各部で行われていた。このペナントは北海道帝国大学との籠球（バスケットボール）定期戦で東北帝大が札幌に持参したもの。戦後北大から東北大バスケット部に寄贈された。

2-54 剣道部の試合記録（学生監事務室日誌）

1926 年（大正 15）

旧学生部移管文書

二高、北大予科、早稲田高等学院、東北学院等との剣道試合について記述。

○女子学生

東北帝国大学の女子学生

東北帝国大学の女子学生は、1913 年（大正 2）に入学した 3 名のあとしばらく途絶えるが、1922 年（大正 11）に理学部数学科に 2 名の聴講生が入学。翌年からは法文学部を中心に毎年本科生として女性が入学するようになった。当時東大・京大は正規の学生としては女性を受け入れておらず、また文科系の学部を持つ帝国大学は東北と九州に限られていたこともあり、東北帝大には、帝国大学中最も多く女性が集まった。その中には、朝鮮や中国からの留学生も含まれている。

こうした女子学生の増加に伴い、1929 年（昭和 4）頃、のちに法文学部の河野與一教授夫人となる中村多麻らを中心に結成されたのが、全学女子学生同窓会「芝蘭会」であった。

2-55 法文学部女子学生を受講ノート

石母田英次寄贈資料

岡崎義恵教授『日本文芸の潮流』の受講ノート。石母田氏はNHK仙台放送局（ラジオ）に勤務する女

性アナウンサーの草分け的存在であったが、1929 年、東北帝国大学法文学部に入学し、話題となった。

2-56 理学部数学科の女子学生〔写真〕

1929 年（昭和 4）4 月／【C012015】

林鶴一旧蔵資料

2・3 列目右端に、森本治枝、江角ヤス、金光荣、酒井十代ら四人の女子学生が並ぶ。

2-57 生物学教室教職員学生一同

大正 13 年（1924）4 月／【C009906】

「ハンス・モーリッシュ先生の思い出」より畑井新喜司、モーリッシュらとともに女子学生の姿も。

2-58 芝蘭会の会合にて〔写真〕

1933 年（昭和 8）頃

梶井幸代・重雄氏提供

東一番丁・明治製菓にて。

2-59 芝蘭会の会合にて〔写真〕

1940 年（昭和 15）／【C012515】

写真中央は石原謙法文学部教授。その右隣には朝鮮・梨花女子専門学校出身の学生趙淑卿。中国や朝鮮出身の女子学生も「芝蘭会」の会員であった。

○留学生

東北帝国大学の留学生

東北帝大の留学生は、1915 年（大正 4）に理科大学化学科に入学した中国人留学生鄭貞文（1891～1969）に始まる。以後戦前を通じ東北帝大に学んだ外国人学生は 279 名。当時植民地支配下にあった朝鮮・台湾出身の学生を併せると合計 445 名にのぼる。その中でも最も多くを占めるのが中国人留学生であり、次いで朝鮮、台湾という順序となる。

留学生のありかたにも変遷があった。大正期の留学生は東北帝大に入る以前から日本の高等学校や専門学校で留学生を送るなど長期にわたり留学生を送っており、蘇歩青（1902～2003）や陶熾（1897～1978）など留学中に知り合った日本人女性と結婚した者も少なくない。一方昭和期に入ると、中国国内の高等教育機関の整備により、中国の大学を出てから東北帝大に直接留学する者が増えてくる。入学方法も、学部学生に限らず、「専攻生」等の身分で短期間留学する者が増えていった。東北帝大ではこうした学生を対象とした特別コースを開設すべ

く、「外国人留学生特別講習会」等を実施して留学生教育にあたったが、日中戦争の勃発によりほとんどの学生は帰国、その試みは十分な成果を挙げることができなかった。

東アジア以外では、1917（大正6）～22（大正11）にかけて6人のフィリピン人学生が医学部に留学。欧米からの学生も僅かながら確認することが出来る。

2-60 日本初の外国人理学博士・陳建功（数学科卒業記念写真）〔写真〕

1923年（大正12）／【C011924】

林鶴一旧蔵資料

最後列中央に見えるのが陳建功（1893～1971）。1929年（昭和4）に外国人留学生として初の理学博士号を取得。帰国後は後輩の蘇歩青とともに「陳蘇学派」を形成し、中国現代数学界のパイオニアとして国際的に高い評価を得た。理学部数学科には陳・蘇を含む多くの中国人学生が学んでいる。

2-61 東北帝大交響楽団の指揮者・陶熾〔写真〕

1925年（大正14）11月

『東北大学交響楽団史』より

陶熾（1897～1952）は作家・陶晶孫としても著名な医学者。九大医学部卒業後、夫人の故郷である仙台に移り理学部物理学科に入学した。草創期の東北帝国大学交響楽団で常任指揮者として活躍。同時に作家としても彼の代表作である「音楽会小曲」等の作品を発表し、多才ぶりを発揮していた。

2-62 学友会音楽部「モーツァルトの夕」パンフレット

1925（大正14）年11月28日

学友会オーケストラ部資料

工学部講堂で開催された音楽部主催のコンサート。指揮者として「陶学士」（陶熾）の名が見える。

2-63 蘇歩青の学位請求書（複製）

1931年（昭和6）2月

入試課移管文書『学位』

蘇歩青は東京高等工業学校卒業後東北帝国大学に学び、陳建功に次ぐ日本の大学二番目の外国人理学博士となった数学者。卒業後東北帝大に併設されていた臨時教員養成所の教員となり、帰国後は浙江大学・復旦大学等で中国現代数学の開拓者として活躍。また政治家としても手腕を発揮した。

○学生思想

思想問題と昭和初期の学生

戦前期日本の学生運動は、1918年結成の東京帝国大学新人会を中心に全国広がった。東北帝国大学においても、法文学部発足間もなく「社会科学研究会」が結成されている。

当初の東北大生の活動はそれほど激しいものではなかった。しかし1930年代にはいと、経済不況による社会不安とともに、学生の逮捕や検挙事件、学内での騒動が増えていく。1932年（昭和7）には法文学部の学友会「強立会」が発行していた学生新聞『法文時報』の論調をめぐる大学と学生側の対立が強まり、強立会自身も同会の学生自治組織としての再編をめざす学生と反対学生が対立、解散に至った。1933年（昭和8）には京都帝大の瀧川事件に呼応した騒動が起こる。また留学生のなかにも、共産党の活動に関わりを持ったとして処分を受ける学生が少なからず見られた。

こうした状況のもと、学生運動を抑え「思想善導」を行うことが課題とされ、学生に対する管理体制が強化されていく。但し東北大学では他大学と比べ教員の指導力によって問題を解決しようとする傾向が強く、又法文学部では入学に際しても思想問題で高校を中退しその後「転向」した学生に対し過去の問題は問わない方針を明示するなど「教育的」視点を重視した対応が行われた。文部省から思想善導費として配分された訓育費は、多くの場合、教師・学生の会合における茶菓子代などに消えたという。

2-64 「転向」学生の受入に関する新聞記事〔写真〕

1936年（昭和11）

学生部移管『思想関係新聞記事』より

2-65 太田正雄教授の留任要請に押しかけた「鷗外の会」メンバー〔写真〕

1937年（昭和12）

神奈川近代文学館提供

「鷗外の会」は、1937年（昭和12）に、木下杢太郎のペンネームで知られる太田正雄教授が医学部生のために開いた読書会。当時太田は医学部の思想善導教官として思想問題で検挙された学生たちの相談役を務めていたが、保護観察中の（元）学生達の希望で太田教授のもとでの勉強会が開かれることとなった。太田によれば、「完全なヒューマニティ」に達するには、東洋と西洋の文化を吸収しその中で揺れ動いた鷗外に学ぶ必要がある、という考えのも

とに鷗外を選んだのだという。しかし太田はこの年東京帝国大学への転任が決定。太田を慕う学生達は留任運動を起こす。会はその後法文学部の河野与一教授を中心に続けられたが、特高警察による監視が強まる中で、1938年に活動を停止した。

2-66 瀧川事件に関する東北帝大法文高代会議のビラ

1933年（昭和8）6月
京大瀧川事件は、大学自治や学問の自由を脅かすものとして、京大以外の大学の学生にも強い衝撃を与え、東北帝大でも強い反対運動がおこった。高代会議とは法文学部学生内の出身高校別代表者会議。

2-67 『東北帝国大学法文時報』51, 52号

1932年（昭和7）
服部英太郎文書
法文学部では会報を発行しない代わりにこの「法文時報」を発行した。実際には東北帝大全体の学生新聞として学部を超え広く読まれた。しかし学生思想に対する統制が強まる中、掲載内容をめぐり大学と学生が対立。学生達は大学から独立したかたちでの刊行を目指したがうまくいかず、1932年に廃刊となった。なおその後1936年には『東北帝国大学新聞』が創刊されるがこれも思想問題との関係で間もなく廃刊した。

2-68 「現代学生罵倒論」〔図表パネル→別表〕

1929年（昭和4）
『自修会報』15号より

〔第3コーナー 戦中期〕

●通史テーマ「戦時下の東北帝国大学」

3-1 東北帝国大学学旗

1940年（昭和15）

●企画テーマ「戦争と東北大生」

日中戦争開始後、学校教育の現場では、集団的勤労作業等の導入や軍事教練の必修化などで戦時色が強まってくる。1941年には防空訓練や学徒動員の組織となる「東北帝国大学報国隊」も結成された。

当時の大学生は、兵役法の特例規定によって徴兵年齢に達したあとも兵役に就くことを免除されていた。学生はこの間、学問に、課外活動にと青春を費やすことができた。しかし戦局の悪化はこうした彼等の「特権」をも奪っていくこととなる。太平洋戦争の始まった1941年12

月からは卒業時期が繰上げられ、1943年12月には、学生の徴集猶予停止に伴い、東北帝大でも法文学部の767人の学生が軍隊へと入隊した。戦場に出ることを免除されていた他の学生も、勤労働員の徹底により、やがて軍事工場の労働力として動員。校舎ではなく工場が、彼等の「学生生活」の舞台となっていった。

3-2 東北帝国大学報国会中央会則〔資料〕

1941年（昭和16）
学校報国団の編成に関する文部省の指示により、東北帝国大学でもこの年「東北帝国大学報国会」が結成され、各学部の学友会や「体育連盟」「文芸連盟」等に所属する学生団体もこの報国会のもとに再編された。例えば剣道・柔道・弓道・陸上・山岳・野球・庭球・卓球・籠球・ラグビー・蹴球・水泳・スケートの各部が「鍛錬部」、乗馬・射撃・航空・漕艇部が「国防訓練部」とされ、美術・文芸・映画・音楽部は「教養部」の下部組織として位置づけられている。

3-3 防空訓練用の鉄兜

防空訓練や実際の避難に際して使われたヘルメット。大学の徽章の上に薄く見える油性インクの文字「図共闘」は、のちの全共闘運動に際して「再利用」されたことを示すものか。

3-4 防毒マスク

3-5 評定河原運動場での勤労奉仕〔写真〕

1938年（昭和13）頃 / 【C008303】
長谷川米吉資料

東北帝国大学では全学的な総合運動場の建設が大正年間から課題とされ、1936年（昭和11）に創立25周年記念事業の一環として野球場と陸上競技場を備えた本格的な運動場がつくられることとなった。その造成には学生達の勤労奉仕作業が充てられた。

3-6 青葉山護国神社での勤労奉仕

1939年（昭和14）9月 / 【D05-1-014-043】
医学部卒業記念アルバム
戦没者慰霊施設として仙台城本丸跡に置かれていた招魂社は、1939年に全国的な政策の一環として「護国神社」にあらためられた。神社の拡張整備には仙台市内の学生生徒が総動員で駆り出され、東北帝大の学生たちも鋤を握って働いた。

○「学徒出陣」

東北帝国大学の「学徒出陣」
東北帝国大学の「学徒出陣」の実態について

はまだわからないことも多いが、1943年12月時点での東北帝国大学の入隊者数については、東北大学史料館に記録が残されている。この記録によれば、この措置により同年12月に入隊した学生は、法文学部学生767名となっている。それ以前に年齢制限の超過などですでに軍隊に入っていた学生も加えると、全学での入隊者数は914名にのぼった。その95%は法文学部の学生で、これは理科系の学生の場合引き続き徴兵延期の措置が採られたからである。もっともその場合も年齢制限があり、留年者や浪人した学生などは理科系であっても徴兵される可能性があった。

もちろん、その後も1945年8月にいたるまで、徴兵年齢に達し検査に合格した学生は随時軍隊へと送り込まれていった。東北帝大から軍隊に送り込まれた「学徒兵」が最終的に何人にのぼったのか、正確な数はわかっていない。在学中の戦没者については、大学に残されている記録から80名ほどが確認できているが、このほかに戦死を確認できずに除籍となった学生もいると思われる。

なお、1943年当時、朝鮮・台湾出身学生には兵役の義務はなかったが、「特別志願兵」なる制度が設けられ、日本への留学生を含む多くの大学生が、この制度によって、事実上強制的に軍隊に入れられている。東北帝国大学の場合は、43年12月の時点で31名の外地出身学生がおり、うち12名がこの特別志願兵となったことが確認されている。

(表は後掲)

3-7 出陣学徒に贈られた村岡典嗣教授の短冊

1943年(昭和18)

原田夏子氏寄贈

いわゆる狭義の「学徒出陣」により入隊する原田隆吉氏(元本学教授)に対し、指導教官である村岡典嗣教授が送った短冊。

あとうちて かへり来む日を まちてあらむ
よみのこしゆく 千々の書はも

3-8 昭和18年秋入隊者に発行された仮卒業証書

1943年(昭和18)11月

斎藤敬止氏寄贈

1943年12月の一斉入隊者のうち、最高学年に進み

一年後の卒業が見込まれる者に対しては、「出陣」に際して学部長名での「仮卒業証書」が手渡された。彼等の多くは、その一年後、二度と大学に戻ることのないまま自動的に卒業扱いとなった。

3-9 入隊を控えた学生のレポート

1944年(昭和19)7月

中村吉治文書

1944年秋に入隊を控えた法文学部経済科の学生が、「経済史」の授業のレポートとして提出したもの。「出陣」を控えた心境が綴られた貴重な記録。



3-9 入隊を控えた学生のレポート

○学徒動員

東北帝国大学の学徒動員

1944年(昭和19)2月の「決戦非常措置要綱」により中等学校以上の学生生徒を年間を通じ動員する体制が整えられると、東北帝国大学でも同年6月頃から本格的な勤労働員が開始される。当初は上級生を中心とする形で動員が始まったが、1945年の初頭頃には一年生も動員の対象とされるようになった。

学生の勤労働員先は、理工系の場合は、化学系の場合は化学工場、機械系の場合は航空機工場等といった具合にそれぞれの専門分野に応じたかたちで、個別分散的に決められた。文部省の都合で「勝手に」動員先が決められないよう大学側が直接交渉して受入先を決めることも少なくなかったらしい。一方文科系の場合は、専門性に関係なくまとまった人数で工場等への動員が行われた。遠隔地の動員先の場合は、学生達は現地で集団生活を送り、若手教官が監督者として交替で派遣されていた。

医学系の学生は勤労働員が抑えられていたが、

それは軍医養成の必要からであり、学生の中には、在学中に軍医学校の学生として軍籍を持つ者も少なくなかった。

※別表 東北帝国大学学生の主な勤労働員先(学外)
→後掲

3-10 法文学部出勤学徒壮行式〔写真〕

1944 年(昭和 19) 6 月

河北新報社提供

片平構内中央講堂の前にて。法文学部ではこの年 6 月から苦竹の陸軍造兵廠への動員が開始された。

3-11 法文学部三年生陸軍造兵廠退所記念撮影〔写真〕

1945 年(昭和 20) 6 月／【C008926】

3-12 『学徒動員便覧』

中村吉治文書

3-13 『春樹集』

1945 年(昭和 20) 6 月

原田夏子氏寄贈

法文学部の勤労働員学生による回覧文集。苦竹の陸軍造兵廠と群馬・伊勢崎の中島飛行機工場にいる学生達のあいだで回覧された。

3-14 『伊勢崎隊現地報告』

1945 年(昭和 20) 6 月

石崎政一郎文書

中島飛行機の伊勢崎工場に動員された学生達は、いくつかの民家等に分宿し、現地で様々な役割分担を決めては共同生活を送った。こうした学生たちの状況を、交替で派遣される若手教官が視察し報告した文書。

3-15 「東北帝国大学学徒隊」の看板

3-16 「東北帝国大学法文学部荒田目分室」看板

1945 年(昭和 20)

1945 年 4 月(昭和 20)に入学した法文学部生たちは、当時すでに授業が全面停止されていたため、入学当初から志太村(現大崎市)へ、疎開を兼ねて援農動員に駆り出された。この看板は同村の荒田目神社内に掲げられた看板。同年 5 月の「戦時教育令」に基づき動員先でそれぞれ結成された「学徒隊」は、従来の「報国隊」をもとに、非常時にはこれを戦闘部隊として活用できるよう位置づけられた組織であった。

〔第 4 コーナー 戦後復興期〕

●通史テーマ「戦後復興と新制東北大学」

4-1 大学ノ革新振興ニ関スル具体的方策ノ件

1946 年(昭和 21) 1 月

鈴木廉三九文書

大学の今後について全学教授・助教授から集めた意見をまとめたもの。「教育と研究」「大学自治」「定年制」など 12 項目にわたる改革案が列挙されている。

●企画テーマ「戦後復興と学生のチカラ」

東北大学の戦後は、1945 年 9 月に、空襲で屋根に穴が空いた法文学部の講義室で行われた「終戦記念講演会」からはじまった。大学に帰ってきた学生たちのなかには、学生服も入手できず軍服姿のままの者が少なくなかったという。

食糧不足、物資不足と猛烈なインフレのなか、生活は困難を極めたが、学生達は、互いに助け合いながらこれを克服していく。学生生活に必要な物資の確保のために「学生組合」が発足し、外地に家族を持つ学生達は協力し合って「在外父兄救出仙台学生同盟」を結成した。学生達の文化・スポーツ活動も徐々に盛んとなり、これらは戦後仙台の文化復興を推進する原動力ともなった。

4-2 海軍工廠から譲り受けたホーロー引き食器

終戦直後、学生課の職員が軍から譲り受けた物資

○在外同胞救出仙台学生同盟

在外同胞救出仙台学生同盟

1946 年(昭和 21) 2 月、外地に家族を残した学生達が、家族の早期帰還実現と学生達の相互扶助を直接の目的に結成した組織。当初は「在外父兄救出仙台学生同盟」と称した。当時東京その他の年で学生達による同様の組織が結成されていた。仙台では東北帝大・二高・女専や宮城学院・東北学院など仙大・高校・専門学校等の学生・生徒が参加し、仙台駅前に張られたテントに学生が交替で勤務しては、炊き出し、落ち着き先の確認、荷物運び等々の引揚者の支援活動を行った。駅頭での奉仕活動は仙台市民の関心を引き話題となった。仙台駅頭で送り迎えた引揚者の数は 23 万人にも及んだという。また学生達の自活のため中学生むけの進学講習会の開設、印刷事業なども行っていた。旧ソ連・中国地区を除く諸地域からの引き揚げ事業が一段落した 1950 年(昭和 25)、同盟はそ

の役割を終えて解散した。

4-3 『在外同胞救出仙台学生同盟史』

1950 年（昭和 25）



4-4 在外同胞救出仙台学生同盟解散式〔写真〕

1950 年（昭和 25）2 月
仙台市戦災復興記念館提供

○学生団体の活動

4-5 敗戦直後の学生団体一覧〔パネル→別表〕

4-6 東北大学中央講堂〔写真〕

【C003726】

旧仙台高等工業学校から引き継いだ講堂を 1943 年（昭和 18）に改造して完成。戦中は「学徒出陣壮行会」等の舞台となったこの講堂は、終戦直後は学生演劇やコンサートなど学生たちの文化活動の拠点となった。のち大学生協に引き継がれ「公孫樹食堂」となったが、1994 年（平成 6）に取り壊された。

4-7 『東北学生新聞』第二号

1946 年（昭和 21）

1946 年に創刊された学生新聞。東北帝国大学新聞部が編集発行。当初は在仙諸大学を中心とする東北地域全体の大学新聞として編集されていた。

○学生組合

4-8 開店時の学生組合喫茶店「公孫樹（いてふ）」〔写真〕

1947 年（昭和 22）

『東北大学生活協同組合五十年のあゆみ』
片平キャンパス正門付近の空き部屋を利用した学生組合が開設した喫茶店。メニューのコーヒーは進駐軍の兵たちの飲みカスを買ってきて作ったものだという。

4-9 学徒援護会から配給された学生組合のトラック

〔写真〕

1947 年（昭和 22）

『東北大学生活協同組合五十年のあゆみ』
学生組合の結成に伴い、学生達はトラックを入手し食料や文具・本など組合が扱う物資を集めた。

4-10 学生部主催教養講座パンフレット

1947 年（昭和 22）

学生組合喫茶「公孫樹」や、書店「宝文堂」などの広告が見られる。

4-11 学校協同組合文化講座 巖本真理バイオリン演奏会〔写真〕

1949 年（昭和 24）9 月／【C005614】

4-12 コンサートチケットを売る学生〔写真〕

1949 年（昭和 24）頃／【C005620】

4-13 厚生会館建設趣意書

1949 年（昭和 24）

鈴木廉三九文書

現在の北門食堂を建設する際の募金趣意書。同所にはかつて創立 25 周年記念会館が建っていたが戦災で焼失していた。

○学生アルバイト

戦後の学生アルバイト

終戦直後、多くの学生が、生活費や学費を稼ぐ手段としてアルバイトを必要とした。学生に人気が高かったのはやはり家庭教師であったが、戦後間もない頃は求人も少なく、極めて高い競争率であった。また食糧事情が悪い頃は農村への援農も人気が高かったが、これも高い倍率であった。その他では米軍が駐留した関係で、通訳や翻訳など英語関係のアルバイトも人気が高かった。多くの学生は、夜警や土方仕事、さらには販売業務など、様々なアルバイトを経験したようである。

4-14 仙台市内の中学・女学校に掲示された家庭教師先募集広告の掲示案

1947 年（昭和 22）4 月

総務部移管『庶務関係 雑』より

○イールズ事件

東北大学イールズ事件

G H Q 民間情報教育局顧問 W. C. イールズは、1949 年（昭和 24）7 月の新制新潟大学開学式にさいして共産主義的思想を有する教員を大学から追放するべき旨を述べ、その後も各地

の大学で同様の趣旨の講演を行い波紋を呼んでいた。1950年（昭和25）5月にイールズが東北大学で講演を行うことが知らされると、大学は混乱を避けるためこの講演について広く公示せず限られた数の学生だけに聴講するよう通知したが、これを知った学生たちは激しく抗議し学内外に激しいビラがまかれた。当日は午前九時から法文学部の講義室で講演会が行われたが、会場の学生から「どういう資格で来たのか」「講演は私的なものか公的なものか」などの質問が相次ぎ、そうした問答が続く中イールズは講演を断念して降壇、別室での懇談会へと切り替えられた。学生たちは講演流会後会場を占拠して学生大会を開き、また四名の学生の逮捕が知られると「全学決起集会」を開催して高橋総長に抗議するなど、激しい紛争となった。

4-15 イールズ事件関係ビラ

1950年（昭和25）

事件に対する大学の告示、イールズの講演要旨、および講演に反対する学生のビラ



○旧制高校文化と教養部

新制東北大学と旧制高校文化

1949年（昭和24）の新制大学発足に伴い設けられた第一、第二、第三、教育の各教養部（分校）では、それぞれ旧制の高等学校・専門学校等の校舎や人材を引き継いで教育が行われた。このうち第一～第三教養部は次第に富沢の第一教養部（一教）へと統合されていく。一教は旧制二高の三神峯校舎を引き継いだもので、教官の多くも当初は旧制二高以来の教師であったため、旧制二高で培われた独特の校風・文化が一教にもさまざまな形で持ち込まれることとなつ

た。新制東北大学の多くの学生たちも、こうした環境のなかで、旧制高校の香りを味わいながら学生生活を送ったのである。

4-16 昭和24年度入学式入学宣誓文

昭和24年4月

学務部移管文書

4-17 新制文学部第一号の卒業証書

1953年（昭和28）3月

赤尾綱男氏寄贈

4-18 昭和二十六年入学試験受験心得

1951年

4-19 東北大学教養部新聞 13号

1954年4月

一戸富士雄氏寄贈資料

4-20 第一教養部 栗野観音前に集う学生〔写真〕

1950年（昭和25）11月29日 / 【C013905】

新制大学文学部の2期生。正面玄関の上には、旧制二高の校章である蜂章がまだ飾られている。栗野観音は、旧制二高随一の名物教授・栗野健次郎の退官に際し作られた仏像。二高廃止後第一教養部に引き継がれ、のち川内地区に移転したが、現在は最初の建立地である農学部構内（旧二高北六番丁校舎）に鎮座している。

4-21 新制大学第一回運動会実行委員会メンバー〔写真〕

1949年（昭和24） / 【C003215】

小原主一氏提供写真

4-22 第二教養部運動会〔写真〕

1955年（昭和30）頃 / 【C006004】

第二教養部は工学部に進む学生が主として学ぶ場で、校舎は旧制仙台高等工業学校の校舎が使われた。各教養部ではそれぞれ運動会等のイベントが開催され、さながら一つの独立した学校のような様相を呈していた。

4-23 東北大学教養部 優勝旗

国際文化研究科事務部移管

4-24 東北大学富沢分校看板

第一教養部は、1957年（昭和32）に第二教養部と合併し「富沢分校」となった。その翌年には河内に移転し「川内分校」と改称。

4-25 第一教養部遠景〔写真〕

1955（昭和30）頃か

○新制大学のシンボル

シンボルマークと学生歌

多数の学校を包括し、キャンパスを各地に分散させる形で発足した新制東北大学にとって、大学としての一体感やアイデンティティをどのように作りあげていくかは、当初から大きな課題であった。こうした課題に応えるため、新制大学発足直後に早速「東北大バッジ」の図案募集が学友会（新聞部と生活部）によって行われ、工学部学生作品である宮城野萩の意匠と「東北大」の文字が入ったデザインが当選。これはその後も2004年に現在の公式ロゴマークが作られるまでの長い間、東北大学のマークとして使われた。

1953年（昭和28）には、学友会による学生歌の募集も行われ、以後しばらくの間、学生歌の募集・選定が行われた。その中でも最も広く歌われているのが、最初の年に選定された「青葉燃ゆるこのみちのく」である。これは創立百周年に際し、あらためて本学の「学歌」に制定されている。

4-26 東北大バッジ制定に関する新聞記事〔写真〕

東北学生新聞 昭和24年10月25日

4-27 学生歌「青葉もゆるこのみちのく」楽譜

1953年（昭和28）

阿座上竹四名誉教授寄贈

4-28 昭和30年度学生歌「若さはからだに」楽譜

1955年（昭和30）

旧学生部移管文書

4-29 学生歌のレコード

阿座上竹四名誉教授寄贈

○大学祭

大学祭

東北大学の大学祭は、戦後1947年（昭和22）にまず医学部で復活。1949年（昭和24）からは全学的規模で行われるようになっていく。

4-30 大学祭の準備をする学生〔写真〕

1955年（昭和30）頃か

竹内貞子氏提供

4-31 新制大学発足記念大学祭プログラム

1949年（昭和24）

学生部移管文書

4-32 昭和26年度大学祭 模擬裁判・模擬国会記録

写真 1951年（昭和26）／【C010312】

学生部移管文書

4-33 大学祭企画に関する経済学部自治会の掲示

1950年（昭和25）

服部英太郎文書

○学生寮

新制東北大学の学生寮

東北大学では戦前には全学的な宿舎は存在せず、他地域出身の学生の多くは下宿生活を送っていた。終戦直後、大学に戻ったものの下宿先がないという学生が多数でたため、大学では、非常措置として一部の学生を本部事務棟内に仮住まいさせる一方、旧陸軍造兵廠の松風寮や、富沢地区に転出したあとの二高（台の原）明善寮の建物などを借用し寄宿舎とした。

新制大学発足後は、二高・工専・女専・師範から引き継いだ学生寮が大学に移管され、明善寮・如春寮・日就寮などが東北大学の寮となった。1953年（昭和28）には新制東北大初の新寮として有朋寮が開寮、当時としては最新の設備を備えたモデル寮と言われた。

これらの寮では学生による「自治」が大幅に認められ、寮の意志は寮生大会で決定。委員長以下、炊幹（炊事担当）、ゲル幹（会計担当）等々の役割分担のもと共同生活が行われた。ストーム、寮歌等の旧制高校以来の風習も引き継がれ、年一回の寮祭では、様々に仮装した寮生たちが市内を闊歩した。

旧制諸学校から大学が引き継いだ寮は、その後おおむね1970～80年代に個室を中心とした鉄筋コンクリートの新寮へと建て替えられ、寮生の生活スタイルも変わってきているという。

4-34 戦後東北大学の学生寮〔パネル〕→後掲

4-35 三神峯明善寮のコンパ〔写真〕

1952年（昭和27）2月20日／【D05-1-010-001】

斎藤尚生名誉教授提供

4-36 三神峯明善寮の寮生たち〔写真〕

1952年（昭和27）頃／【d05-1-010-007】

斎藤尚生名誉教授提供

新旧ゲル幹交替にて。三神峯明善寮は旧第二高等学校三神峯校舎の寮を引き継いだもの。

4-37 一番町における明善寮生の仮装行列〔写真〕

『山紫に—東北大学明善寮三十年史—』より

4-38 明善寮寮祭のダンスパーティ〔写真〕

『山紫に—東北大学明善寮三十年史—』より

寮祭には如春寮の東北大生や宮城学院・白百合短大などの女学生も参加した。

4-39 メーデーのデモに参加した宏富寮生〔写真〕

『東北大学新聞』第300号より

4-40 如春寮の寮生〔写真〕

竹内貞子氏提供

4-41 野球をする女子学生〔写真〕

竹内貞子氏提供

4-42 『有朋寮案内』

1955年（昭和30）

横沢一男氏寄贈

有朋寮での学生生活の様子を記す。当時寮内には以下のサークルが存在し、各サークルの紹介記事も載せられている。

文学研究サークル	語学サークル
経済研究サークル	思想科学研究会
東洋文化研究会	中国研究会
聖書研究サークル	コーラスサークル
FDサークル（フォークダンス）	
友人グループ	スポーツサークル

4-43 『有朋寮夜警日誌』

1954年（昭和29）

横沢一男氏寄贈

4-44 『有峰』2号（有朋寮寮報）

1954年（昭和29）

横沢一男氏寄贈

4-45 『如春寮十年史 でこぼこ道』

1959年（昭和34）

竹内貞子氏寄贈

4-46 日就寮の寮報『八木山』第10集

1962年（昭和37）

4-47 看板 六如寮

書家としても著名な有井癸巳雄教養部教授の筆によるもの。六如寮は旧制二高陸上競技部の寮として発足。東北大学移管後は一般学生が入居した。

4-48 雑誌『明善』

1959年（昭和34）

明善会寄贈

4-49 明善寮の部材に記された、旧制二高学生の落書き

1981年の旧明善寮解体時に寄贈されたもの。

4-50 明善寮食堂〔写真〕

1981年（昭和56）

旧制二高から引き継いだ明善寮は、老朽化に伴い1981年（昭和56）に鉄筋コンクリート四階建ての新寮に建て替えられた。写真は解体直前の旧寮の様子。

4-51 明善寮〔写真〕

1963年（昭和38）頃／【D05-2-071-002】

○戦後の学生スポーツ

戦後東北大生の学生スポーツ

新制大学発足後、私立大学を中心とする学生スポーツの隆盛のなかで、東北大学の運動部が全国レベルで活躍することは難しくなっていたが、それでも漕艇部やヨット部などが全国トップレベルの活躍を見せている。

戦後の東北大学における運動部（学友会体育部）は、新制大学発足の時点で16、昭和30年代の末には28を数えた。各部の目標となる様々な対校戦としては、新制大学が発足した1949年（昭和24）から東北地区大学総合体育大会が行われており、また1962年（昭和37）には、それ以前から各競技ごとに行われていた旧帝国大学の対校戦を統合し「国立七大学総合体育大会」（現在の「全国七大学総合体育大会」）を開催している。個々の学校との定期戦としては、戦前から行われていた北海道大学との定期戦を続けている部が少なくない。いずれも今日に至るまで続けられ、各部の大きな目標となっている。

4-52 ヨット部艇庫看板

学友会ヨット部寄贈

4-53 ヨット部全国制覇記念〔写真〕

1958年（昭和33）

鈴木廉三九文書

4-54 片平中央体育館〔写真〕

1957年（昭和32）頃／【C002528】

4-55 軟式野球部全国大会遠征費募金の趣意書

4-56 軟式野球部優勝記念ダンスパーティー券

1951年（昭和26）

学友会準硬式野球部寄贈

三重・宇治山田で開催される全国大会への遠征費用の寄附金集めの趣意書。ダンスパーティーの開催も、部やサークルの資金集めの方法としてよく行われた。

4-57 東北地区大学スキー大会優勝杯

1958年（昭和33）製作

校友会スキー部寄贈

4-58 第1回東北大・北大総合体育大会プログラム

1956年 (昭和31)

旧学生部移管文書

4-59 第5回東北地区大学総合体育大会プログラム

1954年 (昭和29)

旧学生部移管文書

○漕艇部ローマ・オリンピック出場

漕艇部 ローマオリンピック出場

問題：東北大学出身の五輪代表は全部で何人？

……答は9人。

1960年5月、東北大学のエイト・クルーは選考会で勝利し、晴れて日本代表となった。準決勝で出した5分59秒6 (2000m) は、その後22年間、公式の日本最高記録となった。

東北大学クルーは、日本選手団の一員として、8月8日にスカンジナビア航空のチャーター機で羽田空港を出発し、ローマに到着した。9月2日のレースで、地元イタリア・クルーとデッド・ヒートの末、30cm 差で決勝進出を逃したが、世界を舞台に健闘した。

東北大学ボート部は、旧制第二高等学校端艇部の伝統を受け継ぎ、塩釜の艇庫を拠点として活動していた。当時珍しかった科学的トレーニングの導入と、後援会をはじめ大学全体の応援をうけて、五輪日本代表の座を勝ち取った。

東北大学は現在も、年2回の海上運動会という形で、ボート競技の普及に力を入れている。ボート部の学生たちは、1982年から名取の艇庫に拠点を移し、国立大学の中では数少ない、大学日本一を狙える実績を積み重ねている。

4-60 日本代表選手団 名簿 (和文／英文)

1960年 (昭和35)

千葉建郎氏所蔵

4-61 ローマ五輪日本選手団のユニフォーム

1960年 (昭和35)

千葉建郎氏所蔵

○小テーマ 東北大生の文芸活動

戦後東北大学学生の文学活動

戦時中抑圧されていた文化活動は、敗戦後急速に息をふきかえす。特に東北地方における文化活動は盛んであった。「仙台は文学不毛の地」「東北大学からは作家らしい作家が出ない」と

いう世評に抗して、昭和30年前後東北大学の学生による文学活動が活発化し、文芸雑誌が創刊された。『パルク』(東北大学文芸部)・『象形』(東北大学文芸部1952年(昭和27)1月創刊)・『さんさしおん SENSATION』(東北大学教養部文芸部1959年5月(昭和34)創刊)・『GAN』(詩誌 東北大学文芸部1961年(昭和36)11月創刊)等である。小説・戯曲・詩などの創作のほか、批評にも重点を置いていた。こうした同人雑誌は、文壇にとっては、新人発掘の重要な場でもあった。文芸部はその性質上、必ずしも集团的活動が中心とはならなかったが、大学祭における講演会の開催・自作自演の演劇公演(宮城学院女子大学文芸部との合同公演)や、他大学文芸部と合同で読書会を行っていた。また東北大学短歌会も短歌雑誌を刊行している。

4-62 『叢林』

1957年 (昭和32年)

東北大学短歌会／佐々木靖章氏寄贈

4-63 『GAN』(詩誌) 1号

1961年 (昭和36) 11月

東北大学文芸部／佐々木靖章氏寄贈

4-64 『GAN』(詩誌) 10号 (表紙 関俊治)

1965年 (昭和40) 3月

東北大学文芸部／佐々木靖章氏寄贈

4-65 『パルク』 3号 (表紙 上田朗)

1953年 (昭和28) 4月

東北大学文芸部／佐々木靖章氏寄贈

4-66 『パルク』 4号 (表紙 畠山實)

1953年 (昭和28) 12月

東北大学文芸部／佐々木靖章氏寄贈

4-67 『パルク』 5号 (表紙 坂本益夫)

1954年 (昭和29) 12月

東北大学文芸部／佐々木靖章氏寄贈

4-68 『象形』 11号 (表紙 三浦喜代子)

1957年 (昭和32)

東北大学文芸部／佐々木靖章氏寄贈

4-69 『さんさしおん SENSATION』 1号 (表紙 大原亮一)

1959年 (昭和34) 5月

東北大学文芸部／佐々木靖章氏寄贈

〔第5コーナー 高度経済成長期〕

●通史テーマ「高度経済成長と東北大学」

●企画テーマ「戦後社会の変化と東北大生」

漕艇部の五輪出場という快挙で1960年代の到来を迎えた東北大生。それは高度経済成長の中で東北大生の学生生活をめぐる環境が大きく変わっていく、変化の時代の幕開けでもあった。60年代から70年代にかけ、多くの東北大生の学生生活の場は、帝国大学や旧制高校の歴史から切り離された、川内・青葉山キャンパスへと移った。角帽・学生服というスタイルも、終戦直後にはまだ一般的であったが、この時期を通じキャンパスから消えていった。大学が大衆化し、学生の価値観が多様化する中で、戦前以来の学生身分の象徴は、その意味を失っていったのである。

学生の変化・多様化にともない、大学そのものも様々な対応を迫られていく。60年代末にピークを迎えるいわゆる「大学紛争」は、そうした動きの中で、大学や学生のあり方をめぐる様々な価値観が激しくぶつかり合った出来事であった。

5-1 創立五十周年記念大学祭大学祭プログラム

1957年（昭和32）

旧学生部移管文書

5-2 学生歌発表会プログラム

1958年（昭和33）

旧学生部移管文書

5-3 創立五十周年記念大学祭 映画と公演のタベプログラム

1957年（昭和32）

旧学生部移管文書

5-4 創立五十周年記念大学祭大学芸能祭プログラム

1957年（昭和32）

旧学生部移管文書

5-5 東北大学主催 ドラマコンテストプログラム

1958年（昭和33）

旧学生部移管文書

5-6 東北大学フォークダンス同好会 FOLK Fun

旧学生部移管文書

5-7 東北大学混声合唱団〔写真〕

学友会オーケストラ部寄贈

5-8 記念講堂前での入学式勧誘風景〔写真〕

1961年（昭和36）頃

広報課移管写真

5-9 食堂でくつろぐ学生〔写真〕

1962年（昭和37）／【D06-1-005-005】頃

5-10 工明会会館にて〔写真〕

1962年（昭和37）頃

5-11 試験中の理学部生物学科学生〔写真〕

1960年（昭和35）頃

5-12 工学部の講義風景（沼知教授）〔写真〕

1962年（昭和37）／【D06-1-005-009】

5-13 大学祭パンフレット 5点

1960～67年

5-14 1965年大学祭のポスター

1965年（昭和40）

5-15 大学祭 歯学部の出店風景〔写真〕

1969年（昭和44）

5-16 工明会運動会の仮装行列〔写真〕

1969年（昭和44）／【K078223】

○川内分校

川内の風景

東北大学川内キャンパスは、仙台城廃城後、戦前・戦中には第二師団司令部など陸軍の施設がたち並ぶ軍用地として使われたが、1945年（昭和20）7月の仙台空襲で灰燼と化し、終戦後はそのまま米軍用地（川内キャンプ）として接收された。米軍進駐後、川内キャンプには米兵の宿舎のほか、チャペル、クラブハウスやその他の娯楽施設、ゲストハウスなどが立ち並んでいた。

1957年（昭和32）に米軍が撤退したさい、跡地利用をめぐって宮城県、仙台市などと協議が進められ結果、まず現在の川内北キャンパスと青葉山植物園が大学に移管され、教養部と理学部附属青葉山植物園がこの場所に設置された。米軍から引き継いだ白塗りの建物群は、当面の間、講義室、実験室、研究室などとしてそのまま使われていた。

川内の風景が現在見られるような鉄筋コンクリートの建物で埋められていくのは、1970年代に入ってからである。

5-17 川内地区平面図〔パネル一略〕

1965年（昭和40）頃

5-18 川内会館〔写真〕

1965年（昭和40）頃／【K203118】

広報課移管写真

5-19 哲学・人文研究室〔写真〕

1965 年（昭和 40）頃／【203107】

広報課移管写真

5-20 川内地区全景写真〔写真〕

1960 年（昭和 35）頃

5-21 教養部大講義室〔写真〕

1962 年（昭和 37）頃／【D06-1-005-002】

広報課移管写真

旧米軍キャンプ時代にチャペルとして建てられた。大学移管後は大講義室として使われた。のち大学紛争の際には全共闘学生による教養部封鎖の出発点となった。

5-22 川内地区移転記念大学祭プログラム

1958 年（昭和 33）

旧学生部移管文書

5-23 『川内の学園生活』

1959 年（昭和 34）

川内教養部での学生生活のしおり。川内独自のサークル組織の一覧も掲載されている。

5-24 川内教養部のサークル組織一覧（→別掲）

1959 年（昭和 34）

5-25 『がくえん』（川内分校・川内東分校学生自治会のパンフレット）

1963 年（昭和 38）

佐々木靖章氏寄贈



5-26 校舎の建設が進む教養部〔写真〕

1969 年頃／【K138508】

○ 60 年安保

東北大学の「60 年安保」

漕艇部の五輪出場に湧いた 1960 年（昭和 35）は、一方で日米安保条約反対運動をめぐるデモや集会が相次いだ年でもあった。

日米安保条約改定をめぐる反対運動は、1959 年（昭和 34）4 月以降断続的に続けられていた。

1965 年春にはいとと東北大学でも動きが盛んとなり、4 月末から 6 月初旬にかけてはほぼ毎週のように、1000 人規模の学生が参加する集会が川内地区を中心に開かれ、市内のデモ行進がこれに続いた。なかでも国会デモで東大生 1 名の死亡した翌日の 6 月 16 日から、国会での自然成立となった 18 日にかけては、連日、3 ～ 4000 とされる学生が集まり、抗議の学生集会とデモが行われた。

5-27 仙台駅前での安保反対デモ〔写真〕

1960 年（昭和 35）6 月

『東北大学新聞』300 号より

5-28 明善寮での安保問題勉強会〔資料〕

1960 年（昭和 35）

根本猛雄氏寄贈

5-29 東北大学 60 年安保闘争関係ビラ集〔資料〕

1960 年（昭和 35）

根本猛雄氏寄贈

○昭和 40 年事件

教員養成課程分離問題と青葉山移転

1965 年（昭和 40）9 月、青葉山移転や教員養成課程分離をめぐる大学運営に対する抗議の学生集会が片平で開かれ、数千人の学生がこれに参加するという事件が起こった。

東北大学は戦後学制改革の過程で、旧帝国大学としては唯一、旧制師範学校を包摂し教員養成課程を開設したが、1964 年（昭和 39）、この教員養成課程を分離し宮城教育大学を設立することが評議会で決定され、さらにこれを東北大学農学部的位置する現在の雨宮キャンパスとする方向で話が進められた。教育学部内の十分な意思統一、あるいは農学部における青葉山移転についての意思決定を経ずにこうした大事業が進められていくなか、大学運営のあり方に対する学内外の批判が強まり、抗議学生の逮捕事件を契機に全学的なストライキ事件へと発展したのである。

大学では事件後「東北大学管理運営検討委員会」等の委員会を組織して、これはその後の長い「改革」議論の出発点となっていく。

5-30 『昭和 40 年の本学の問題に関する検討報告書』

1972 年（昭和 47）

昭和 40 年における紛争事件に関する大学の検討報

告書。その後「改革」議論の出発点となった。

5-31 昭和40年 全学ストライキ風景【写真】

1965年（昭和40）9月15日

○「大学紛争」

東北大学の「大学紛争」

1960年代後半は、全国の大学で激しい大学紛争が展開された時代である。1968年（昭和43）に東京大学・日本大学を中心に起こった全共闘運動は、政府や警察の介入を経て次第に過激さを加え、国家や体制そのものを否定するラジカルな運動へと展開していった。紛争は東大安田講堂での攻防戦のあと全国へと波及し、東北大学でも1969年（昭和44）春以降教養部を中心に全共闘系学生やそれに反対する学生達による、激しい紛争が続けられた。

東北大学における紛争の最も中心的な争点となったのが、東大紛争等の経緯をふまえ1969年（昭和44）5月に国会に上程された「大学の運営に関する臨時措置法」である。この法案に対しては、大学の自治を侵害するものとして様々な立場から反対表明が出され、東北大学その他在仙諸大学でも頻繁にデモや集会が開催された。そうしたなか、「大学解体」をスローガンとする全共闘系学生は、6月4日の教養部大講義室の占拠を皮切りに、教養部の主要建物をバリケードで封鎖。9月には片平や青葉山にも封鎖が拡大する。10月には片平キャンパス北門外や南町通付近で全共闘系学生と機動隊が「市街戦」を展開し、市民にも被害を及ぼす状況となる。一方で封鎖に反対する学生たちもデモ・集会を頻繁に開催し全共闘系と対立。ヘルメット姿の学生によるゲバ棒を手にした乱闘が繰り返され、キャンパス内は騒然とした状況となった。

11月23日、封鎖の続く教養部に、大学の要請で機動隊が突入。教養部理科研究棟での攻防戦を最後に5ヶ月にわたる封鎖が解除。数日後、ものものしい警備の中で、大学の授業が再開された。

5-32（ビラ）7. 26 大学立法強行採決粉砕斗争に起て／全C共斗

1969年（昭和44）

『東北大学学生運動関係資料』より

5-33（ビラ）「全C共斗」「片平共斗」「法学反戦」等を徹底的に糾弾解体し学内自主規律を確立しよう／法学部自治委員会

1969年（昭和44）

『東北大学学生運動関係資料』より

5-34 教養部封鎖解除直後の学長告示

1969年（昭和44）

5-35 封鎖時に構内出入に際し使われた腕章

1969年（昭和44）

5-36 教養部封鎖解除に使われた催涙弾の破片

1969年（昭和44）

5-37 教養部における学生大会の様子【写真】

1969年（昭和44）11月7日

河北新報社提供

教養部講堂付近にて。封鎖に反対する全教養部学生大会に集まる学生達と、その隣で封鎖貫徹を叫ぶ全共闘系学生。

5-38 教養部理科研究棟の攻防戦【写真】

1969年（昭和44）11月23日／【C002014】

旧科学計測研究所寄贈

5-39 封鎖解除後の文学部・教育学部棟【写真】

1969年（昭和44）11月23日

「帝大解体」「封鎖貫徹」等の落書き、ビラ等がみえる

5-40 東一番町での全学連デモ

広報課移管写真

●企画テーマ 「トンペイ」学生の歳月

大学紛争が沈静化した70年代後半から80年代にかけての学生たちにとって、受験勉強から開放された直後に過ごす教養部時代は、部活やサークルに、あるいはアルバイトにいそしむなかでの「自分さがし」の時間であった。そうして各々のスタイルで教養部生活を満喫した学生は、やがてそれぞれの学部に分散し、卒業だ、就職だ、研究だ、と言っては打って変わったように忙しい日々を送ったのである。

「いまどき」のトレンドとは距離を置いた、垢抜けない東北大生をさす「イカトン＝いかにも東北大生（トンペイ）」といった言葉も、どうやらこの時代に使われ始めたものらしい。大学生のあり方が変化する中で「古典的」な学生を揶揄した言葉であるが、それはまた、流行に

左右されないという東北大生の集団的な自意識
とも言えることができる。

5-41 教養部厚生会館前の風景〔写真〕

1975 (昭和 50) 年／【K055918】

広報課移管写真

5-42 入試当日の教養部構内〔写真〕

1976 年 (昭和 51) 3 月／【K002601】

広報課移管写真

5-43 入試合格発表〔写真〕

1977 年 (昭和 52) ／【K003115】

広報課移管写真

5-44 教養部学生談話室〔写真〕

1975 年 (昭和 50) ／【K174808】

広報課移管写真

5-45 解体直前の旧明善寮の寮生の部屋〔写真〕

1981 年 (昭和 56)

5-46 「女子学生の集い」〔写真〕

1981 年 (昭和 56) ／【K065008】

広報課移管写真

5-47 在仙大学合同新歓行事「春フェス」のプログラム

1982 年 (昭和 57)

5-48 鬼仏教官表

1982 年 (昭和 57)

発行：東北大学動く会

教養部の各教官の授業について、単位の取りやすさという観点からまとめられた一覧表。教養部生活を満喫しようとする学生の必需品であった。

5-49 新入生オリエンテーション当日の教養部

1983 年 (昭和 58) 4 月／【K056304】

広報課移管写真

5-50 外国人留学生ホームビジット〔写真〕

1983 年 (昭和 58) 10 月／【K071414】

広報課移管写真

5-51 薬学部実習風景〔写真〕

1980 年代か／【K139309】

広報課移管写真

5-52 大学祭 仮装行列のあとで〔写真〕

1982 年 (昭和 57) 3 月

「Dr. スランプ」等のプラカードと衣装で一番町を歩く。

5-53 大学祭のプログラム

1979 年、1980 年、1982 年

5-54 文学部・教育学部棟と文系グラウンド

1985 年 (昭和 60) 前後か／【K113801】

広報課移管写真

現在附属図書館 2 号館が建っている地域は、文系学生の「球児」による戦いの場であった。

5-55 昭和六十年度卒業式総代答辞

1986 年 (昭和 61) 3 月

旧庶務部移管文書

5-56 東北大学日中友好西藏学術登山隊〔写真〕

1986 年 (昭和 63) ／【K069719】

広報課移管写真

山岳部の O B および現役部員からなる「東北大学山の会」のメンバー。中華人民共和国チベット自治区の未踏峰念青古拉 (ニエンチェンタンラ) への初登頂に成功した。

5-57 国立七大会 グライダー優勝トロフィー

1987 年 (昭和 62)

七年に一度の地元開催にて手にした栄冠。この年は総合得点でも地元東北大学が優勝を果たした。

5-58 第 1 回ロボットコンテスト〔写真〕

1990 年 (平成 2) 5 月／【K602912】

広報課移管写真

5-59 深夜マラソン〔写真〕

1991 年 (平成 3) 11 月／【K680222】

広報課移管写真

評定河原運動場の正門付近で。深夜マラソンは学友会応援部の主催行事として 1963 年 (昭和 38) より 2001 年 (平成 13) まで行われていた。写真当時は評定河原から川内・青葉山・八木山経由の周回コースであった。のち青葉山発着のコースに変更されたが、2002 年に中止された。

5-60 学友会応援部による受験生応援〔写真〕

1989 年 (平成元) 2 月／【K620804】

広報課移管写真

5-61 合格発表の風景〔写真〕

1988 年 (昭和 63) 3 月

広報課移管写真

5-62 新入生オリエンテーション風景〔写真〕

1988 年 (昭和 63) 頃

広報課移管写真

1970 年以降、東北大学では長い間入学式が行われず、教養部の各教室で行うオリエンテーションが大学生としての初めての行事であった。

5-63 高校生に贈る東北大学

1989 年（平成元）

高校生に贈る東北大学企画委員会編
東北大学の学生の自主企画で製作された、東北大学
を目指す高校生にむけた紹介本。各学部から編集ス
タッフを募り、学生ならではの視点で「トンペイ」
の学生生活を紹介している。

5-64 卒業式 御輿で壇上に向かう学生総代【写真】

1991 年（平成 3）3 月

広報課移管写真

5-65 大学祭 学生バンドの演奏【写真】

1993 年（平成 5）11 月

広報課移管写真

80 年代から 90 年代初頭の卒業式では、賛否両論の
なか、学生達によるさまざまな演出が毎年繰り上げ
られていた。

5-66 第 7 回国際まつり【写真】

1992 年（平成 4）10 月／【K691406】

広報課移管写真

三条町の国際交流会館で 1986 年（昭和 61）以来行
われる行事。国際色あふれる催しが行われている。

5-67 海上運動会にて【写真】

1995 年（平成 7）

広報課移管写真

名取・貞山堀で春秋の 2 回行われる海上運動会は、
旧制二高の対部ボートレースの系譜をひく行事。

5-68 教養部表札

新制大学の発足に伴い、学生達の広い教養を育むと
いう理念のもとに発足した教養部は、経済成長に伴
う大学教育に求められる内容の変化の過程で存在意
義そのものが問われるようになっていた。東北大学
でも大学紛争以後の「改革」の中で、これを重要な
検討課題として独自に改革案を検討してきたが、大
学設置基準の大綱化など国の大学政策全体の影響を
受け、1993 年（平成 5）3 月をもって教養部が廃止
された。

〔第 6 コーナー 現代〕

●通史展示「東北大学新時代」

6-1 国立大学法人東北大学 吉本高志学長辞令

2004 年（平成 16）4 月

東北大学は 2004 年 4 月に「国立大学法人」へ移行した。

●企画テーマ「東北大生の現在」

1990 年代以降の「大学改革」の波のなか、
東北大生をめぐる環境も近年様々なかたちで変
化を遂げつつある。

AO 入試や推薦入試など、大学に入る方法は
多様化している。また教養部の廃止以後、一、
二年次のカリキュラムも全学教育と各学部の専
門教育科目を組み合わせたかたちで再編され、
学生たちの学習スタイルも変わってきた。

「東北大生」の構成そのものの変化も、近年
の特色である。1970 ～ 80 年代前半頃およそ
2 割程度であった大学院生の比率は、大学院重
点化や専門職大学院の発足に伴い 4 割弱にまで
増えている。外国人留学生は全体の 5 パーセン
トを超え、大学院だけに限れば 1 割を超えてい
る。出身地域も 70 ヶ国を超えた。社会人入学
制度の導入などもあり、これまで以上に様々な
人々が「東北大生」として学生生活を送っている。

東北大学には現在、学部・大学院あわせてお
よそ 1 万 8000 人もの学生が学んでいる。学生
の気質も変化したと言われる。しかし、青春の
時を過ごす学生たちのエネルギーは、今も昔も
変わらない。

6-2 『北雄』40 号

2000 年（平成 12）

学友会体育部発行の年報。各部の活動内容を知ること
ができる。

6-3 学友会主催新入生歓迎行事パンフレット

1999 年（平成 11）

6-4 東北大学祭パンフレット

2002 年（平成 14）

6-5 『東北大学学生生活案内』 4 冊

1967 年（昭和 42）～ 2006 年（平成 16）

6-6 鲁迅仙台留学記念公演パンフレット

2004 年（平成 16）

鲁迅を敬愛する中国人留学生が企画・実施した、魯
迅と藤野先生の交流を描いた演劇。

6-7 文系食堂前風景【写真】

6-8 川内北キャンパス【写真】

6-9 工学部生協【写真】

6-10 学友会各部の活動【写真】

**6-11 東北大生の学生生活実態調査【パネル】→別
表**

〔特別展示〕

7-2 東北帝国大学学友会メダル等 23 点

7-1 競漕用エイト「萌野（もえの）」→別掲

風見哲夫氏寄贈

1980 年（昭和 55）

学友会漕艇部寄贈

種類	内容	年代
メダル	(不明)	大正 14 年
メダル	乗馬部	大正 12 年
メダル	陸上部	大正 13 年
メダル	体操部？	大正 12 年
メダル	文芸部	大正 13 年
メダル	陸上部	大正 11 年
メダル	乗馬部	大正 14 年
メダル	文芸部部长	大正 13 年
メダル	L. T.	大正 14 年
メダル	乗馬部	大正 13 年
メダル	運動会一等賞	
バッジ	日本体育聯盟維持会員章	
メダル	(不明)	昭和元年
メダル	陸上競技部トラック新設記念	昭和 3 年
メダル	第一回競泳大会	昭和 8 年 9 月
ボタン	全日本体育連盟維持会員章	昭和 3 年
メダル	東北学友会役員卒業記念	
メダル	第貳回競漕大会	昭和 3 年 11 月 2 日
メダル	(不明)	昭和 4 年
メダル	漕艇部第二回大会	昭和 4 年 6 月 9 日
メダル	陸上部	10 月 27 日
メダル	第二回北日本高専射撃大会	昭和 6 年
メダル	全学射撃大会	昭和 6 年

〔別表〕

2-37 1936 年（昭和 11）頃の学生団体一覧（学会含む）

東北帝国大学生物学会	東北帝国大学史学会	東北帝国大学仏教青年会
東北帝国大学法学会	西洋史研究会	同朋会（真宗研究）
東北帝国大学文科会	東北帝国大学伊太利亜会	医学部竹友会（尺八研究）
東北帝国大学経済会	東北帝国大学文学会	東北帝国大学マンドリン倶楽部
東北帝国大学法律生活調査会	日本思想史学会	東北帝国大学囲碁連盟
法律相談所	仙台英文学会	法文囲碁研究会
哲学会	英詩会	東北帝国大学卓球倶楽部
東北帝国大学倫理学会	東北帝国大学言語学談話会	東北帝国大学学生報国会
心理学茶話会	地理学談話会	東北帝国大学芝蘭会
支那学会	東北帝国大学医史学同好会	医学部学生自治会
宗教印度学研究会	陽炎会（俳句研究会）	法文共済部
美学会	彩光会（絵画研究会）	

※出典 『東北帝国大学学生便覧』／『東北大学五十年史』

2-68 現代学生罵倒論

1929年（昭和4）の『自修会報』（理学部学友会会報）に掲載された、騒蟾庵学人「現代学生罵倒論」では、当時の学生が以下のように興味深い形で類型化されている。批評はかなり辛辣で、かなり偏りもあるようだが、当時の学生による学生文化の分析として興味深い。

類	族	派	コメント
新型学生類	モダンボーイ族		1920 年頃発生。キネマ、ダンス、ゴルフ等のブルジョア趣味。女性にもてることばかり考える。
	マルクスボーイ族	所謂マルクスボーイ	1920 年代に発生。若干本を読んだだけでかぶれた者。左翼弾圧により絶滅。
		本当のマルキスト	地下に隠れている。彼等には学ぶべき点があり一概に排斥すべきでない。
	新型文学青年族	雑誌グロテスク派	丸木砂土、梅原北明等のエロ・グロ文学にふけている。
		ロシア文学・戦旗派	ロシア文学・戦旗・文芸戦線等をあさる。いわゆる「赤」文学派
現代学生類	早老生族		大学に入った日から卒業や就職のことばかり考える。運動はまずやらない。
	中堅学生族		所謂まじめな学生。理工系に多い。早く学士号をとって箱入り娘の純情を独占し家でも建てて…などと考える。多数派であったが近年減少。
	中堅紳士族		ブルジョアの御曹司に多い。思想は自由主義的。大学は教養を得るための場所と考える。
	スポーツマン族		中堅学生族と共に多数。頭は単純。子供っぽい名誉心にかられ運動。正当な社会眼が割合わない。
	現代文学青年族		青っちろいことを誇りにする不生産的分子。散歩と恋愛論を引き去ったら何も残らない。
	YMCA族		人に親切にした満足感を味わって喜んでいる。教会に行く女学生がいなくなったら皆改宗するだろう。
旧型学生類	旧式文学青年族		万葉だの芭蕉だのと得意な人々。文科に多い。浮世絵や黄表紙などの方向に墜ちていく者も多い。
	仏教青年会族		不可解な存在
	変物学者族		無闇に学問が好きだが、自分の研究が何千万もの人を殺戮する道具に使われても頓着しない。社会に関心がない。近頃激減。天然記念物として保護するべき。
	反動学生族	観念的国粹反動学生	近年繁殖気味。
暴力的反動学生		近年繁殖気味。学校ストライキ等の始まりには紋付を着て当局の御用として示威活動を試みる。	

3-0 東北帝国大学の学徒出陣 1943年（昭和18）12月時点での入隊学生

学部	在学者数	日本人学生		入隊者数※	入隊者／男子学生
		男子	女子		
理学部	321	312	1	15(0)	4.80%
医学部	416	406		6(0)	1.40%
工学部	612	607		29(0)	4.70%
法文学部	1259	1195	20	864(767)	72.30%
合計	2608	2520	21	914(767)	36.30%

※カッコ内は1943年12月入隊者

3-0 東北帝国大学の学徒動員 学生主な勤労働員先（学外）

工学部	中島飛行機小泉・大田製作所（群馬）、同宇都宮製作所（栃木）、津上製作所（新潟）、日立製作所多賀・日立工場（茨城）、同亀有工場（東京）、日本特殊鋼羽田工場（東京）、保土ヶ谷化学郡山工場（郡山）、第一海軍火薬廠（宮城・船岡）、第一海軍技術廠（神奈川）、海軍第一航空廠（茨城）、陸軍多摩技術研究所（東京）ほか
理学部	日本曹達二本木工場（新潟）、東北金属諏訪製作所（宮城）、日本化学工業郡山工場（福島）、呉海軍工廠（広島）、佐世保海軍工廠（長崎）ほか
法文学部	陸軍東京第一造兵廠（宮城・仙台）、中島飛行機伊勢崎工場（群馬）、ほか

4-34 戦後東北大学の学生寮

名称	開設年	場所	沿革
昭和舎	1927 年	①中島丁 ②新坂通	医学部教授布施現之助が開設した宿舍をもとに、1927 年医学部所管の寄宿舎として設置。1939 年新坂通に移転。2000 年 9 月火災で焼失し閉寮。
松風寮	1945 年	①小田原 ②上杉	1943 年陸軍造兵廠の宿舍として開設。終戦後学生寮として移管。 1981 年明善寮とともに新寮に建て替えられ上杉に移転
宏富寮	1945 年	北山	1943 年工学部の工員宿舍として建設。終戦後学生寄宿舎として大学に移管
霽風寮 (寒山寮)	1945 年	①上杉 ②八木山緑町	1945 年、三神峯移転後の二高明善寮を大学が借り受け霽風寮と称す。1947 年に一部を寒山寮として分離（のち再統合）。 1975 年に八木山に鉄筋コンクリートの新寮が完成し移転。
明善寮 (台の原)	1949 年	①上杉	1906 年二高寄宿舎として開設、1926 年に現在地に移転。戦後三神峯地区に移転したが、三神峯明善寮の火災により一部寮生が旧寮（台の原明善寮）に戻る。新制大学発足時に大学に移管。1981 年新寮に建て替えられる。
明善寮 (三神峯)	1949 年	①富沢	1906 年二高寄宿舎として開設、1945 年制二高とともに三神峯地区へ移転。1949 年二高の包摂により大学に移管された。1953 年有朋寮開寮に伴い閉鎖。
六如寮	1949 年	①雨宮	1937 年旧制二高陸上競技部合宿所として発足。1949 年東北大学に移管。 (1965 年廃止)
浩寮	1949 年	①雨宮	旧制二高柔道部宿所として発足。二高の包摂に伴い東北大学に移管。1976 年尚心寮と統合し「以文寮」として八木山に移転。
日就寮	1949 年	①八木山緑町	1910 年開設の仙台高等工業学校の寄宿舎として片平地区に開設。1940 年八木山に移転。1949 年仙台工専の包摂に伴い東北大学に移管。1971 年新寮に建て替え。
松韻寮	1949 年	①向山	1934 年宮城県女子専門学校寄宿舎として開設。新制大学発足に伴い大学に移管され男子寮として改装。第三教養部の第一教養部への統合に伴い 1954 年閉寮。
如春寮	1949 年	①中島丁 ②雨宮 ③三条町	宮城県女子師範学校寄宿舎として中島丁に開設。1949 年宮城師範の包摂にともない大学に移管される。 1953 年農学部構内に移転。 1981 年三条町に新寮が完成し移転した。東北大学唯一の女子寮。
尚心寮	1949 年	①中江	宮城県師範学校寄宿舎として開設。1949 年東北大学に移管。1976 年浩寮と統合し「以文寮」として八木山に移転。
有朋寮	1953 年	①鹿野	1953 年新制東北大学初の新寮として建設。2001 年老朽化により廃止を決定。2006 年廃止。
以文寮	1976 年	①八木山緑町	尚心寮・浩寮を統合し 1976 年八木山に開設。

4-5 敗戦直後の学生団体一覧〔パネル〕

（学友会各部および学生部に届け出のあった任意団体に限る。学部・教養部独自の組織は除く）

	名 称	当時の顧問教官	目的・事業内容
学 友 会	音楽部	米澤治文	音楽の研究・発表
	音楽部合唱団	米澤治文	合唱曲の研究発表
	音楽部管弦楽団	篠田 紘	1946 年復活
	映画部	平塚博／淡中忠郎	映画研究および鑑賞会の実施
	映画部学生映画新聞社	平塚博	「学生映画新聞」の発行、1949 年発足
	新聞部	中川善之助	「東北学生新聞」の発行、1946 年発足
	講座部	清宮四郎	学内を対象とする講座・公演の実施
	図書部	木村亀二	
	文芸部	桑原武夫	文芸の研究と発表
	文芸部短歌会	桑原武夫	短歌に関する研究・創作・発表
	美術部	村田潔	美術の研究と発表
	演劇部	村田潔	演劇の研究と発表
	宗教部	金倉円照	宗教の研究
	陸上競技部	長谷田泰三	陸上競技
	野球部	清宮四郎	野球
	庭球部	中川善之助	庭球
	ラグビー部	武藤完雄	ラグビー
	排球部	梅津良之	排球（バレーボール）
	蹴球部	松田幸次郎	蹴球（サッカー）
	籠球部	那須省三郎	籠球（バスケット）
	卓球部	瀬戸八郎	卓球
	スキー部	中村左衛門太郎	スキー
	山岳部	中村左衛門太郎	1922 年東北帝国大学山岳部として発足。
	水泳部	中村吉治	水泳
	漕艇部	武藤完雄	漕艇
	ヨット部	福島弘毅	ヨット
	スケート部	安積宏	スケート
	乗馬部	富永齊	乗馬
そ の 他 の 任 意 団 体	生活部	鈴木廉三九	学生生活に必要な購買・配球・斡旋事業、1946 年発足
	学生自治会	（なし）	1948 年発足、学生の自主的生活の充実、学園の徹底的民主化
	苦竹会	中村吉治	原町陸軍造兵廠に動員された学生達の親睦
	写真同好会	桂重次、結城金太郎	学生写真界の向上と写真文化の発展
	茶道会	小林淳男	茶道の学習
	学生法学研究会	中川善之助／清宮四郎／木村亀二	研究会の実施、1950 年発足
	東北大学仏教青年会	山田龍城	仏教研究会の開催、寮の経営、1923 年発足
	東北大学基督教青年会	会津伸／不破祐	聖書研究会、伝導講演会の開催、1930 年発足
	東北大学社会科学研究会	米澤治文／服部英太郎／新明正道	研究会・講演会の実施、1946 年発足
	工業研究会	米澤治文	実地調査・研究会、1947 年発足
	東北大学カトリック研究会	石崎政一郎	各種講演会・修養会の実施、1946 年発足
	芝蘭会	土居光知	女子学生相互の親睦・研鑽。1929 年発足
	中国研究会	木下彰	現代中国社会経済文化の科学的研究
	自然科学談話会	加藤愛雄	自然科学一般に関する会員相互の研鑽・識見の涵養。
	仙台学生鉄道趣味の会	北原重博	鉄道の趣味的研究
	白龍会	宮城音五郎	謡曲研究
	医学部基督教研究会	片桐謙	聖書研究会など、1949 年発足
	日本文芸研究会学生部	岡崎義恵	研究会の実施、1949 年発足
	簿記研究会	中村経次郎	研究会の実施、1949 年発足 1950 年発足
	東北大学歴史研究会	中村吉治	研究会の開催、1950 年発足
	民主科学者協議会東北大班	木下彰／平塚博／一柳寿一	民主主義に基づく学術研究会・講演会など、1948 年発足
	仙台国際連合学生協会	中川善之助	講演会開催、国連関係印刷物の発行、1950 年発足
	日本国際学生協会東北支部	小林淳男	学生を通じた諸外国との文化交流
	東北ユネスコ学生会	有永弘人	学生を対象とする平和文化事業、1947 年発足
	ユネスコ・レターフレンドクラブ	中島良夫	国際文通の実施、エスペラント講演会の実施、1949 年発足
	社交舞踏研究会	（なし）	正確かつ上品優美なる標準社交ダンスの普及等、1947 年発足
	仙台アララギ会	（なし）	短歌に関する研究・創作・発表
	わるぶぎす・ぶたくらぶ	（なし）	現代詩の可能性の探求、1947 年発足
	法社会学研究会	（なし）	研究会の実施、1950 年発足
	社会学研究会	（なし）	社会学の研究、普及、1946 年発足
	英文会	（なし）	翻訳・英文タイプ等の内職の団体契約および英文学研究
	農村文化連盟	（なし）	農村青年の文化向上を図る。1946 年発足
	授業料値上げ撤回同盟	（なし）	授業料値上げ阻止、1948 年結成
	学生喜多会	（なし）	喜多流謡曲の研究、1948 年発足
	赤十字奉仕団	（なし）	災害救護、赤十字ハウスの運営、1948 年発足
	昼休みコーラス	（なし）	合唱練習、1950 年発足
	在外同胞（父兄）救出仙台台学生同盟	（なし）	引揚者の援護。旧制高校・専門学校生含む、1946 年発足
	日本共産党東北大学細胞	（なし）	東北大学の防衛と復興、1946 年発足

出典：『東北大学学生便覧』、学生部移管文書『学生団体届』

5-24 川内分校の公認学生団体一覧 (1959 年現在)

団体名 (文化部)	人員	指導教官	団体名 (運動部)	人員	指導教官
書道部	18	吉良 松夫	スキー部	15	八木 健三
心理学研究会	21	安倍 淳吉	ワンダーホーゲル部	220	生出 慶司
社会科学研究会	19	高橋 富雄	籠球部	7	北村 仁
法学研究会	24	山田善太郎	ゴルフ同好会	35	滝沢 寿三
文芸部	19	永野 為武	軟式庭球部	67	本多 修郎
エスペラント会	12	本多 修郎	航空部	17	大内 義一
ラジオドラマ研究会	22	永野 為武	バトミントン部	41	稲田 大
聖書研究会	20	野村 正敬	自動車部	11	岡崎 七郎
音楽部	26	武田 昭	乗馬部	18	阿刀田研二
化学部	52	樋口 泉	ヨット部	44	山本 宗一
美術部	16	佐藤 明	硬式テニス同好会	98	小山 又次
楽心会	17	牛木弥太郎	漕艇部	59	伊田 友作
うたう会	41	八木 健三	フォークダンス同好会	26	泉 クマ
写真部	10	森 一郎	山岳部	32	古田 惇二
園芸部	20	清水 芳孝	柔道部	32	菅野 俊作
演劇部	14	永野 為武	硬式野球部	37	三宅 雅克
囲碁クラブ	47	有坂 仲明	蹴球部	22	和田 秀三
地学班	8	今泉 力蔵	スケート部	20	樋口 泉
世界文学会	10	小林 敏郎	水泳部	19	吉田 賢抗
学力増進学生会	10	小田原尚興	空手部	25	勝浦 捨造
弁論部	7	山田善太郎	ラグビー部	21	宮川 善造
短歌会	8	扇畑 忠雄	剣道部	20	福本 喜繁
新聞会川内支局	11	作間 忠雄	バレー部	15	福島 富造
海外移住研究会	15	篠田 俊蔵	ハンドボール部	14	峯岸 義秋
自然科学ゼミナール	8	大内 義一			
E・S・S	78	伊田 友作			
英語研究会	16	滝沢 寿三			
社会思想研究会	20	作間 忠雄			
哲学談話会	19	本多 修郎			
鉄道研究会	12	和田 秀三			
フォイエル・グルッペ	17	野崎 駿平			
カトリック研究会	11	寺田 文行			
茶道部川内支部	29	吉良 松夫			

『川内の学園生活』昭和34年度版より

7-1 競漕用エイト「萌野 (もえの)」

「萌野」は昭和55年(1980年)3月、埼玉県戸田市の戸田漕艇場で進水した競漕用「エイト」である。部員の総意で、「緑萌える春の野」という叙情的命名をうけた「萌野」は、昭和57年まで本学漕艇部対校クルーのレース艇として使用され、その後、平成10年(1998年)まで練習艇として使用されてきた。

この艇は、旧制第二高等学校尚志会端艇部OB、堀内浩太郎氏(造艇時の本学漕艇部監督)の設計により、「図南型」船型を採る。船体の材質はスプルー材で、進水当時は薄い象牙色をしていた。ニス塗った船底は、弦楽器のように美しい仕上がりをみせ、徹底した重量軽減への努力と併せて、船大工のまさに職人芸が発揮された「作品」といえる。船大工によい仕事をしてもらうため、在京OBと選監(選手監督=マネージャー)が造艇委員としてデルタ造船所に日参したが、その甲斐あって完成重量89.7kgという超軽量艇が完成し、この年の全日本学生選手権(インカレ)において本学エイトは3連覇を遂げたのであった。

昭和50年(1975年)ごろから欧米では、船体の剛性に優れた、カーボンファイバー製の艇が用いられ始め、50年代後半より日本でも製作されるようになった。本学が昭和58年(1983年)に造艇したエイト「大鯨」(デルタ造船所製)の外板は、アラミド繊維をカーボンファイバーではさんだ強化樹脂を成形したもので、船型は船底の平らな「こだま型」を採る。以降、艇は成形品となり、一艇一艇精魂を込めた手造りの艇は造られることがなくなった。

「萌野」は、本学にとって最後の木製エイト、最後の「図南型」エイトとして大変貴重な艇である。「東北大学漕艇部100年史」編集作業の中で、そうした議論が交わされた結果、大学当局や在仙OB等の理解と協力を得て、平成11年(1999年)7月5日に史料館(当時は記念資料室)に寄贈された。

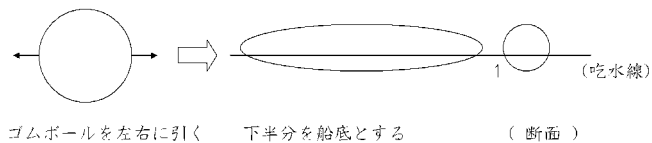
長 さ	15.3 m	型 式	図南型（とんがた）
幅	59.0 cm	設 計	堀内 浩太郎 東北大学漕艇部監督 (昭和 32 ～ 35 年 48 年～ 57 年) 第二高等学校昭和 22 年卒 東京大学工学部昭和 25 年卒
深 さ	29.0 cm		
吃 水	20.8 cm		
重 量	89.7 kg (リガー 18.1 kg 含む)		
価 格	2,170,000 円	造 艇	株式会社 デルタ造船所 (東京都荒川区東尾久)
進 水	昭和 55 年 3 月 21 日		

「図南型（とんがた）」船型

「図南型」は堀内浩太郎氏設計によるレース用ボートの船型である。本学漕艇部と数々の栄光をともにした高速艇で、昭和 34 年に 1 号艇「図南」が進水して以来、昭和 55 年進水の「萌野」まで 8 艇の図南型エイトが造られた。

「図南」は「莊子」逍遙遊篇を出典とする。旧制第二高等学校端艇部後援会は、自らを北方の強と任じ、南方の強豪何するものぞとの意気を込めて、会を「図南会」と名づけた（昭和 40 年からは本学漕艇部後援会名ともなった）。艇名「図南」は、ここに由来する。

エイトの抵抗の 80% は水との摩擦抵抗である。レースボートにおいては、漕ぎやすさを損ねず、いかにして摩擦抵抗を減らすかが設計のポイントになる。一般には艇の横安定性を優先して、吃水線の幅を広げ、その分深さを減じた楕円断面の一部を用いて設計されているのに対し、「図南型」では、吃水線下の浸水面積を小さくして水との摩擦抵抗を減らすために、前・後端部を除いて断面に円弧の一部を用いて設計された（両端に近いところに吃水線下が半円になる部分あり）。感覚的にはゴムボールを左右に引っ張ってできた形の下半分と考えてよい。



「図南型」では、船型で犠牲にした横安定性をカバーするために、船体の中央部分の幅を広くし、船底には船体の中央に寄せて鰭のヒレのような長くシャープなフィンを設置した。また、オールを水に漕ぎ入れる（キャッチ）際に漕ぎやすくするため、8 人のシートの高さがパウ（軸手＝先頭漕手）に向けて徐々に低くなるよう設定されている。

歴 代 図 南 号

艇 名	進水日	主な戦歴	艇長	重量
図南	S 34.7.18	S 35 ローマ五輪予選	15.0m	97.5kg
図南 2 号	S 35.6.21	S 35 ローマ五輪（アルバノ湖）		
図南 3 号	S 36.4.12			
図南 4 号	S 44.1.30	S 52 軽量級世界選手権（アムステルダム） S 58 ユニバシアード大会（ミラノ）		
図南 5 号	S 45.12.25			
寒 風 沢	S 50.3.25	S 50 全日本学生選手権（優勝）	15.0m	105kg
北 斗	S 51.3.9	S 53 全日本選手権（優勝） S 53、54 全日本学生選手権（優勝）	15.3m	95kg
萌野	S 55.3.25	S 55 全日本学生選手権（優勝）	15.3m	89.7kg

2-10 東北帝国大学の学生実態調査（1935 年） 回答数 1074 人

東北帝国大学の学生実態調査(1935年)

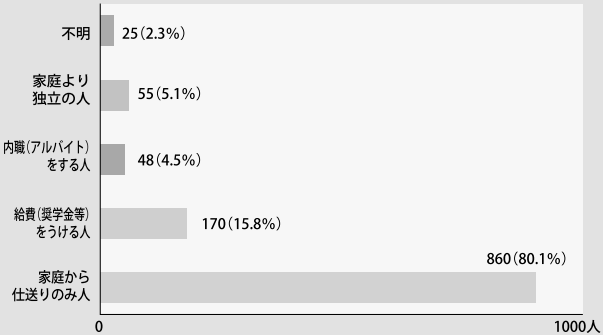
父兄の職業

全学生 1074人	農業 143人 (13.3%)	官公吏 140人 (13.0%)	会社員 129人 (12.0%)	無職 206人 (19.2%)	その他 456人
理学部 165人	農業 24人 (14.5%)	官公吏 20人 (12.1%)	会社員 19人 (11.5%)	無職 35人 (21.2%)	その他 67人
医学部 308人	医師 75人 (24.4%)	農業 46人 (14.9%)	商業 38人 (12.3%)	無職 46人 (14.9%)	その他 103人
工学部 170人	会社員 38人 (22.4%)	官公吏 28人 (16.5%)	商業 16人 (9.4%)	無職 40人 (23.5%)	その他 48人
法文学部 431人	農業 65人 (15.1%)	商業 60人 (13.9%)	官公吏 58人 (13.5%)	無職 85人 (19.7%)	その他 163人

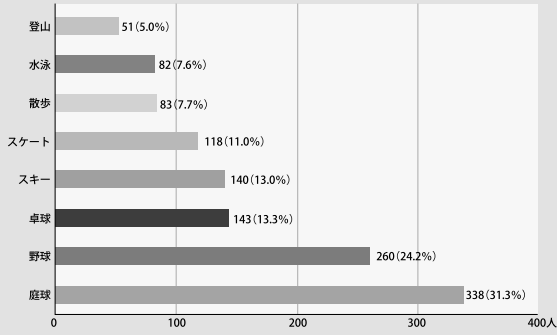
住居

下宿(宿舍含む) 61.9%	自宅 17.4%	その他(借間・アパート等) 20.7%
-------------------	-------------	------------------------

学資の補給源



好きなスポーツ



趣味娯楽

(数字は人数)

室内運動	囲碁 296 (27.6%)	将棋 160 (14.9%)	撞球 152 (14.2%)	麻雀 125 (11.6%)	その他 9 (0.8%)
戸外運動	運動 78 (7.3%)	旅行 47 (4.4%)	散歩 83 (7.7%)	登山 14 (1.3%)	武道 9 (0.8%)
芸術	映画 236 (22.0%)	演劇 26 (2.4%)	洋楽 226 (21.0%)	文芸 113 (10.5%)	絵画 39 (3.6%)
日本趣味	国文学 113 (10.5%)	書道 8 (0.7%)	邦楽 45 (4.2%)	弓道 8 (0.7%)	つり 19 (1.2%)
その他	読書 110 (10.2%)	写真 108 (10.1%)	雑談 26 (2.4%)	園芸飼育 23 (2.1%)	

購読する雑誌

中央公論	改造	文藝春秋	日本評論
258人 (24.0%)	170人 (15.8%)	157人 (14.6%)	33人 (3.1%)

崇拜する人物

西郷隆盛	野口英世	本多光太郎	ゲーテ	トルストイ
94人 (8.8%)	62人 (5.3%)	48人 (4.5%)	42人 (3.9%)	42人 (3.9%)

6-11 東北大生の学生生活実態調査

東北大生の学生生活実態調査(『第4回学生生活実態調査報告書』2002より ※数字は%)

項目	種別	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
出身地域	学部生	東北 41.8	関東 24.4	中部 18	近畿 5.8	北海道 3.1
	大学院生	東北 42.6	関東 24.3	中部 15.9	近畿 6.0	北海道 2.5
家計支持者の職業	学部生	管理的職業 31.7	専門的・技術的職業 16.4	教育的職業 10.5	事務 10.2	生産工程・採掘作業 9.2
	大学院生	管理的職業 27.0	専門的・技術的職業 24.7	教育的職業 12.9	生産工程・採掘作業 8.7	事務 6
住居	学部生	アパート、学生ハイツ、マンション 77.2	東北大学生寮 4.2	下宿・間借り 2.1	東北大以外の寮 0.7	借家(一戸建て) 0.7
	大学院生	アパート、学生ハイツ、マンション 75.8	東北大学生寮 3.5	下宿・間借り 1.2	借家(一戸建て) 1	東北大以外の寮 0.8
通学方法	学部生	バイク 29.0	自転車 26.6	徒歩 20.8	バス 12.2	自家用車 7.5
	大学院生	自家用車 29.8	バイク 19.7	徒歩 18.2	自転車 16.0	バス 12.5
一ヶ月の収入	学部生	10～15万円 46.1	15～20万円 15.7	9～10万円 10.8	9～8万円 4.1	5～6万円 3.7
	大学院生	10～15万円 41.6	15～20万円 22.0	20万円以上 13.1	9～10万円 7.6	9～8万円 3.2
アルバイトの種類	学部生	家庭教師等 41.6	軽労働 38.4	特殊技能その他 10.6	事務 6.2	重労働・危険作業 3.4
	大学院生	家庭教師等 43.2	軽労働 28.6	特殊技能その他 22.6	事務 3.8	重労働・危険作業 1.8
サークルへの加入	学部生	体育会系に参加 35.5	文化系に参加 15.7	音楽系に参加 7.4	以前加入したがやめた 23	加入したことがない 18.5
大学生生活の満足度	学部生	満足している 45	どちらともいえない 31.8	不満 11	大変満足 7.9	たいへん不満 4.3
	大学院生	満足している 43.6	どちらともいえない 33.2	不満 12.8	大変満足 6.5	たいへん不満 4
教官との接触	学部生	特別なことがない限り話をしない 38.2	学習・進路に関し必要な場合話をする 28	全く話をしない 18.9	学業以外のこともよく話をする 14.8	
	大学院生	学習・進路に関し必要な場合話をする 43.8	学業以外のこともよく話をする 35.2	特別なことがない限り話をしない 17.1	全く話をしない 4.0	
教官への期待	学部生	わかりやすく教えて欲しい 20.5	研究者よりも良き教育者でいて欲しい 18.0	社会的実践との結びつきを教えて欲しい 14.4	学生との対話の場を持って欲しい 11.5	講義内容を改善して欲しい 9.3
	大学院生	研究者よりも良き教育者でいて欲しい 20.7	社会的実践との結びつきを教えて欲しい 15.2	学生との対話の場を持って欲しい 11.8	わかりやすく教えて欲しい 11.1	研究成果をあげ教育に還元して欲しい 9.3
休日の過ごし方	学部生	休養・睡眠 16.6	買い物、身の回りの整理家事手伝い 13.2	勉強・読書・研究 12.8	テレビ・ラジオ・映画 10.0	パソコン、ゲーム 7.9
	大学院生	休養・睡眠 17.1	勉強・読書・研究 15.3	買い物、身の回りの整理家事手伝い 14.5	テレビ・ラジオ・映画 11.0	ドライブ・小旅行 7.7
現在の悩み	学部生	将来の進路 31.3	学業 17.2	自分の性格や能力 10.5	経済的問題 7.6	恋愛問題 6.9
	大学院生	将来の進路 32.5	学業 19.9	自分の性格や能力 8.8	経済的問題 8.2	研究室のこと 5.8